

目次

一、卷頭の言

二、特別寄稿

近畿大学	関西学院	谷繁強志哉	宇田川哲哉	佐藤忠之介	酒井進之	大森竜一	志々山文明	松尾正純	成山哲郎
近畿大学	関西学院	谷繁強志哉	宇田川哲哉	佐藤忠之介	酒井進之	大森竜一	志々山文明	松尾正純	成山哲郎
近畿大学	関西学院	谷繁強志哉	宇田川哲哉	佐藤忠之介	酒井進之	大森竜一	志々山文明	松尾正純	成山哲郎
近畿大学	関西学院	谷繁強志哉	宇田川哲哉	佐藤忠之介	酒井進之	大森竜一	志々山文明	松尾正純	成山哲郎
近畿大学	関西学院	谷繁強志哉	宇田川哲哉	佐藤忠之介	酒井進之	大森竜一	志々山文明	松尾正純	成山哲郎

上智大學	四十八	拓殖大學	五十七	中央大學	五十	帝京大學	五十五	東京大學	五十一	東京大學	六十	東京大學	六十三	東京大學	六十九	東京大學	七十二	東京大學	七十五	東京大學	七十八	東京大學	八十一
上智大學	四十八	中央大學	五十	帝京大學	五十五	東京大學	五十一	東京大學	六十	東京大學	六十三	東京大學	六十九	東京大學	七十二	東京大學	七十五	東京大學	七十八	東京大學	八十一	東京大學	八十一
上智大學	四十八	中央大學	五十	帝京大學	五十五	東京大學	五十一	東京大學	六十	東京大學	六十三	東京大學	六十九	東京大學	七十二	東京大學	七十五	東京大學	七十八	東京大學	八十一	東京大學	八十一
上智大學	四十八	中央大學	五十	帝京大學	五十五	東京大學	五十一	東京大學	六十	東京大學	六十三	東京大學	六十九	東京大學	七十二	東京大學	七十五	東京大學	七十八	東京大學	八十一	東京大學	八十一
上智大學	四十八	中央大學	五十	帝京大學	五十五	東京大學	五十一	東京大學	六十	東京大學	六十三	東京大學	六十九	東京大學	七十二	東京大學	七十五	東京大學	七十八	東京大學	八十一	東京大學	八十一

一、
卷頭の言

卷頭の言

全日本学生合気道連盟

第63期委員長 池田将吾

機関紙「連盟誌」は、今年で五十号という節目の号となりました。昨年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響で発行がかなわなかたため、二年振りの発行となりました。はじめに、本誌にご寄稿くださった先生方、また加盟校の皆様に厚く御礼申し上げます。

本誌の持つ機能について考えた際に大きく分けて二つ

のものがあると思います。第一には、一つの号のみで完結する、ヨコ的な機能です。様々な先生の寄稿文が掲載

されており、その後に各大学が独自色を出した紹介文が寄せられている本誌というのは、まさに流派に囚われない組織として誕生した本連盟の特色を現した一冊であると言つても過言ではありません。紙面の制約により、本誌のみで他大学のことを理解するのは難しいですが、目録としての本誌を糸口にして演武会や合同研修会の際に交流をすることで、連盟の意義というものは充分に現れてくることでしょう。二つ目の機能としては、創刊号から現在に至るまでの比較によって現れる、いわばタテに

機能するものがあります。幸いにして本誌は記念号においてバックナンバーをまとめているため、過去の誌面も参照することができます。そこからは、加盟校や連盟自身がどのような変化を遂げているかが見て取れます。また、それは未来への道標にもなります。

有職故実を重視した平安貴族が、その「日常」を記していた日記というのは、子孫たちが先例に違はず儀式を行いうためのものとしても機能していたといいます。組織は違えど、例年決まつた行事が行われ、一年ごとに幹部が交代する本連盟においても、過去の文献資料というものは大変重要なものです。

社会がウイズコロナに舵を切る中で、本連盟も「通常時」の体制へと復帰する時期に突入しています。このようないうな混乱が起こると誰もが予想していなかつた中で、貴重な価値を持つものは後任への情報共有を意図した引継ぎのみならず、各大学や連盟の「日常」を記したものであると思います。そのため、本誌の価値というのは「年限りで終わるものなのではなく、過去から未来へと流れていくものであるのだと思います。

最後になりますが、十月に控える演武大会や悲願である来年度の合宿開催に向け、幹部一同努力いたしますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

二、特別寄稿

成山哲郎先生

「今後の目標」

この度は連盟誌50号の発行をおめでとうございま
す。

毎年春の研修合宿と秋の演武会には昭和60年より
参加させて頂いております。稽古方法の違いを乗り越え
て合気道でお互いに技を研究して切磋琢磨することは、
皆さんのがんばりを大きく広げることでしよう。また、学
生という最も多感な時期に様々な考え方の人たちと合
気道を通して触れ合うことは、人間的にも大きく成長す
るまたとない機会です。当連盟の益々の発展を心より祈
っております。

私は昭和41年より斯の道に入つて以来、今年で56年
目を迎えます。この間には多くの方との出会いがありま
した。私には3人の師匠がおります。
合気道の素晴らしい夢と希望、そして人生に於ける
心の持ち方を導いて下さった富木謙治先生。



合気道の楽しみ方とその教え方、そして何よりも人と人との繋がりの大切さを伝授下された大庭英雄先生。

合気道の技の極意とその奥深さ、そして指導の場までも与えて下され、男としての生き方も示して下された小林裕和先生。

もちろん3人とも植芝先生から直接合気道の手解きを受けられた先生方です。

富木先生と大庭先生は神技と呼ばれた植芝先生の技を誰もが分かりやすく習うことができるよう、特に戦後その稽古体系を整理することに腐心されました。そして武道の現代化という視点から合気道を柔道、剣道に伍する武道とするため合気道の競技化に取り組まれました。

一方で植芝先生の晩年の弟子であった小林先生は「技は説明したらそこで終わってしまう。植芝先生も技は口や筆には記せない。日々進化する。だから死ぬ前が一番強いと仰っていた。」と述べられました。

そんな小林先生が阿部正先生の案内で富木先生の許を初めて訪ねられたのは昭和44年のことでした。以下、

富木先生の没後1周年の記念大会として開催した第3回全国社会人合気道競技大会に寄せた小林先生の文章です。

「開祖、植芝盛平翁の、合氣は和合じや、の精神につとりなぜ別派をつくるのか?どうして共に仲良くやれないのか?といったことから話に入りました。先生は三時間程武道の歴史と理想等を述べられました。

人それぞれに理想や理論が違つても同じ道を歩むものが争うのは良くない、人間は国籍や人種、組織、主義等にこだわりすぐ対立、鬭争に走るが一人間として考えれば仏教ではないが、袖ふり合うも他生の縁、同じ時代に同じ日本人として生れ同じ武道のしかも同じ合気道に志すもの同志が争うのはおかしいではありませんかと生意気な事を申し上げたことが縁となつて後、桃大にて競技合気道を拝見させて頂く事になりました。

そして、成山哲郎氏が私の元に来て植芝盛平翁直伝の合気を修行する様になり、その代り競技合気を学生達に教える様になつた。」

実際、大学を卒業して大阪に来て中に入つてみると、小林先生の技はとてもシャープで厳しい技でした。入り身投げ（相構当）などの投げ技は叩きつけられるような感じでしたし、関節技は味わつたことのないような痛さ。それに非常に速く、切れ味良くシャープでした。我々が富木先生、大庭先生から習った関節技は制御することを主眼とした理合でしたが、小林先生は非常に、効く、技でした。小林先生の指導はその通りにやると非常に技がよくかかる。ポイント、コツをわかりやすく教えて頂きました。

一方で富木先生が遺された剣の理合を手刀の崩しとしてまとめた後の先の崩しのやり方は、小林先生の技にあてはめることが可能ですが、小林先生がされる様々な技を後の先の崩し無しに一般の方に説明するのは少々難しい。富木先生が基本の理合をよくまとめてくれていたから小林先生の技へ当てはめれば良かつたわけです。これは自分にとり大きなアドバンテージでした。

そしてふつうは一人の先生から教わります。一人の師匠につくとその師の影響しか技に出ない、しかし幸い私は富木先生、大庭先生、小林先生に教わりました。複数の先生に習った結果、技には共通点があることがわかりました。お互い技の中で共通のものを探して植芝先生の技に近いものを再現する。植芝先生の技を失わないようにしてわかりやすく後に続く人に伝えることが私は使命だと考えています。

アンケート

『コロナウイルス感染症の流行で最も変化したと感じることをお聞かせください。（私生活上の変化等）』

（回答）

人の気持ちに「気付き」が生じたことではないでしょうか。

コロナ禍となつてからは当然ながらこれまで通りの稽古を道場で行うことはできません。入館時には検温と健康チェック、手洗いやうがいの励行、そして稽古時間の短縮、マスクの着用、稽古後には畠やロッカー、使用した備品類の消毒等、気を配らなければならぬことは多くあります。そのような「障害」を乗り越えても来たいと思えるものが道場に無ければ、一般の道場生は会費を払つてまで稽古には来ません。

幸い私の道場では稽古時間帯による稽古生の多寡に違いはあります、総じてコロナ禍前と参加者の総数に大きな変化はありません。

稽古生の皆さんは合気道と向き合う時間の大切さを

改めて測り、そして受け入れる我々指導者の側でも稽古生の皆さんと共有している時間の大切さを見つめることに改めて気付かせてくれたように思います。

松尾正純先生

自由寄稿文



大東流佐川幸義先生の実弟が（合気ニュースのインタビューで）「引くのがこんなに効くとは思わなかつた」と兄が興奮氣味に語ったという一節（記憶です、余裕があれば当該号を）がありました。

もちろん先生は単に引き技のことをいつたわけではない（と思い）、私はそれが何かをとても知りたくなりました。

稽古を重ねて佐川先生の「引く」ことのひとつを、私なりに（何を指摘したか不明なので私の解釈）表現できるようになりました。

「受け」には引かれた感覚はなく、周りで観察しても「引く」動作は見えないという動きです。

佐川先生がどのような動きを仰ったのかは不明ですが、私にとっては探求心をとても刺激する珠玉の一言になり感謝しています。

というわけで、皆さんに稽古の際に、もしヒント・道筋があれば励みになるのではと思い、私の考えを下記に記します。

1、片手持（固定）崩しの一考察

合気道を始める際、手を持たせて稽古することが多い（私たち団体の最初の審査技は片手持ち二か条抑え一）。

動きの中で手を持たせる、動きのない中で持った手を押す、引く、または強く固定する、いろいろな稽古状況が考えられるが、ここでは「強く握られた場合」「固定」を考える。

私が海外で長い合気道歴のある方と初めて手合わせする際も、片手持ちで始まることが多い。

多くの場合、腰を落として（上腕二頭筋、三頭筋を使つて）勁く掴む。力が競合すると動かせないか、手が外れてしまうが、競合しないで動かすことができる、掴んで密着した手に影響され、受けはバランスを崩す。

例えば木刀を強く握らせて木刀を動かしてみると手の中で回ってしまう、角度をつけると手が外れるのと同じことで、上腕二頭筋で力を入れると腕は木刀と同じになるが、柔らかい手のままで動かすと握った手は外れず受けはバランスを崩す。

とは言え、柔らかい手のまま動かそうとしても実際には力が入つて（上腕二頭筋を使う）しまい中々できない。

上腕二頭筋を使ってモノを動かす日常生活を送っているのだから、力を入れるなど言つても難しい。また柔らかい手にして動かそうとすると力が抜けてしまい、握っている相手は動かないし、もちろん崩すこと出来ない。

そこで私は「最初に腕を曲げず（これがポイント）に真っすぐ伸ばし、手のひらを開いて強く握らせてから、仕手は腕と体の角度を変えないで上腕二頭筋を使わず、形のまま身体を動かし（腰を少し回す、膝を曲げるなど）てみよう」と伝えている。

それができると受けが掴んだ手は、仕手の手から離れることなく受けはバランスを失う。

稽古の際は、握った手と握られた手とに隙間が出来たら「離れた」と捉えて、最初からやり直す。

なお、手指を開いて腕を伸ばすのは上腕二頭筋を使えない状況にして（不随意筋の）上腕三頭筋を使い、鍛えるためです。

上腕二頭筋不関与の動作が出来るようになれば、腕を伸ばしたり手指を開くことも必要は無くなり、自由に身体を使つた余裕の合気道ができます。

アンケート

『コロナウイルス感染症の流行で最も変化したと感じることをお聞かせください。（私生活上の変化等）』

（回答）

「コロナ禍に遭遇して」

コロナ禍に私が巻き込まれた時、真っ先に頭に浮かんだのは「良寛（禅僧）さんの、災難にあう次節は災難にあうがよく候、死ぬる時節には死ぬがよく候、是はこれ災難を逃る妙法にて候」でした。

いろいろとあった人との関わりがほとんど絶たれた環境に置かれて、今まで出来なかつたことに取り掛かる機会と考えることが出来たので、この言葉は私にとってまさに妙法でした。

合気道に関しては、まず早朝散歩の人影が現れる前（動き回りながら木刀を振るため）に起き出して素振りを工夫しました。

私は重い素振り木刀を2千、3千回と振るのは、非力の自分には出来ないと思っていました。

しかし重いものも重くはなることに気づいてから、文献の「何千回素振り」記述が誇張ではないことを実感しました。

また素振りは、主に不随意筋（上腕三頭筋）の鍛錬で、振り下ろした剣先をぴたりと止めるのに随意筋の関与は不適切で合気道にとっては有害なことにも気づきました。

つまり、今まで身体にとつて不自然な動き（上腕二頭筋強化）を重ねていたと分かったのでした。

これらに関する知識を私は寡聞にして全く知らず、また仲間の誰に聞いても知らなかつたので、剣の門外漢ですが合気道を楽しむ人間として書きました。

そして素振りで体感した新しい知見を早速応用して稽古仲間と合気道を楽しんでいる今日この頃です。

日本人の長寿人生でコロナ禍のような未経験の出来事に遭遇することはこれからもあるかもしれません。そんなとき時代を超えて心を打つ言葉が我々が生きる上で役立つことを思い出してくだされば幸いです。

志々田文明先生



本連盟の発展を願つて

○田中茂穂先生の思い出

初めて田中茂穂先生に接したのは、私の学生時代に恩師富木謙治先生のお供で日本武道館勝浦研修センターでの講習会に参加したときでした。控え室には両先生始め養神館の松尾忠敬先生、井上強一先生がおられたでしょうか。富木先生は戦前の合気道揺籃期を、田中先生以下諸先生は戦後の合気道揺籃期をそれぞれ生き抜いた方々であり、贅沢はひとときであったと思います。以後田中先生とは時に雑談をする程度でしたが、新型コロナ感染症パンデミックの前の五、六年間は、学連の諸行事で秘話を伺うことが出来ました。先生には威厳がありましたが。実際にお話しすると柔軟にして寛大、往時のさまざまな思い出をいささかのてらいもなく話して下さり、感服したものです。

ある年の研修会では、田中先生と私の講話の時間が組まれました。私は、植芝盛平先生が合気道を形成していく

る戦前搖籃期の時代の話や、植芝先生と大東流合氣柔術との関係などについて小一時間お話をしました。後に出来られた田中先生はかなり気合いを入れられて、明治天皇の御製を紹介しながら武士道関連の話しを長時間にわかつてなされました。

またあるときの演武会で、相手を痛めつけるような場面があると、隣に座つた私を見て首をかしげられました。先生の弟子への慈愛を知り大いに共感したものです。

田中先生を偲んで、慎んでご冥福をお祈りします。

○学生のみなさまへ

昭和二年の秋、植芝盛平先生は一家をあげて京都府の綾部から上京しました。その年の夏、早稲田大学柔道部の学生であった富木謙治先生は綾部に植芝先生を訪ね、一ヶ月あまりの指導を受けています。道場の窓を閉めて部外者は誰も入れない状態での一対一の稽古でした。そこで植芝先生は、「どこからでもかかってきなさい」と命じました。富木青年が組みつきに行くと、師は体さばきすること数度、ついに組みつく瞬間に投げられたという

のです。稽古を終えて東京に戻った富木先生は、続けて上京する植芝先生一家の借家探しに尽力し、合氣道の研究に生涯を尽くすことになります。

この逸話の紹介の意図は、植芝先生が凄かつたという贊美にはありません。問題は、植芝先生が見事な体さばきをされた上で、投げる力があつたという点にあります。そこに着目すると、何をどのように稽古するかを考えることができます。それは原因と方法を考える科学の精神をもつことを意味します。武道は「わざ」から「心」への進化の道です。学生のみなさんには、合氣道の伝統と科学の精神をもつて着実に学び、もつて有意義な人生を送っていただきたいと思います。

○退任のご挨拶

この度、事情により、師範を退任させていただくことになりました。各先生はじめ関係の皆様には大変お世話になりました。各先生はじめ関係の皆様には大変お世話になりました。各先生はじめ関係の皆様には大変お世話になりました。谷繁強志氏にお願いしております。よろしくお願ひ申し上げます。(二〇二三七三一稿)

・

アンケート

『コロナウイルス感染症の流行で最も変化したと感じることをお聞かせください。（私生活上の変化等）』

（回答）

コロナウイルス感染症は、人類史で最も大切な営みのひとつであり、人との接触の機会を著しく奪いました。困ったものですが、忙しく駆け回っていた日常に、ゆつたりと考える時間をくれた点は意外にして有意義な変化であつたと思います。

大森竜一先生

技を練磨し心を練る



昨今「キレ易い人」が増えてきているように思うのは私だけでしょうか。街中でも不審な行動をしている人を見かける機会が増えていますし、突然奇声を発している人も見かけます。患者数がクリニックのキャパシティーを越えているために予約の連絡をしても診察してもらえず、電話越しに罵声を浴びせる人も多いようです。知り合いの看護師や事務職の方々も嘆いていました。コロナ禍での生活が続くことにより、職場でも家庭でも人々には多くのストレスがのしかかっており、不安定な心の状態を生み出していることが「キレ易い人」を増加させている気がします。また、度重なるストレスの発生により、心も身体も疲弊し、思考が停止に近い状態に陥っていることなども理由として考えられます。生きていくうえで壁にぶつかったとき、人々は少なからずストレスを覚えますが、通常の精神状態であれば試行錯誤しながら乗り越えるための最良の方法を見つけ、またはそれら

の壁を回避する方法を探し出すははずですが、社会全体として「諦め」や「なげやり」の雰囲気が漂っていることが、「我慢でいられない人」を増やしているようと思えます。さて、皆さんは幸いにも合気道という武道を稽古しています。技を通して心を練るのが武道です。様々な困難に対処するのは大変なことですが、感情の起伏が激しくなった時にこそ、冷静に自分に問いかけることを心掛けください。困難な時にこそ合気道を稽古している意味を、合気道を稽古することの価値を見出して下さい。これからも未来を支えていくのはあなたの方です。期待しています。

アンケート

『コロナウイルス感染症で最も変化したと感じることをお聞かせください。（私生活上の変化等）』

（回答）

日常のマスク着用ですね。

常にマスクを着用していることにより、冬はメガネが曇り、夏は息苦しさえ感じています。マスクの効果とワクチンの効果については諸説ありますが、私自身多くの人と接する仕事であるにも拘らず、一度も感染することなく過ごせていることは、マスクとワクチンの効果、そして健康管理への気配りが功を奏しているのだと思っています。周りで何人の人たちが陽性判定を受けている中、無事でいられるることは運もあるかもしれません。が、備えあれば悪いなし（悪いも軽減）だと思っています。

マスクの着用は随分見慣れた光景にはなりましたが、それでもいろいろな意味で違和感はあります。安心してマスクを外せる日が来ることを切に願います。

思いつきり深呼吸して、新鮮な空気を取り込みたいで
すね。

山田高廣先生

ウクライナ侵攻

今年最大の出来事はロシアのウクライナ侵攻である。出来事の大きさだけでなく、その意味と影響力の可能性の大きさは21世紀に入つて最大であろう。武道の稽古をする者として武の在り方の観点からも関心を持たざるを得ない。

20世紀の後半から、いわゆる文明国との紛争は武力ではなく、交渉によって解決を図るのが歴史の趨勢であると、多くの人が思うようになってきた。これに真っ向から水を懸けたのが怪しい？文明国ロシアのペーチンである。

人間の歴史は権力を巡る騒乱の歴史である。どこの国の史書でも統治者の興亡の歴史が中心であり、その変遷は武力の行使によることが通常で、同一家系内においても同様の例が珍しくない。権力の平和的移行が制度的に保障されるようになったのは、近代になって議会制民主主義が登場してからである。



この制度は主要国の中ではまず英國から始まった。

英國は島国で11世紀のノルマンコンクエスト以来国外からの侵略がなく、英仏百年戦争の結果英王室は大陸の領地を全て失いブリテン島統治に専念し、英國国教会の成立でローマ法王の影響が弱まつたことなど、

国内政治を基本的に王・貴族・聖職者・地主・大商人等の折衝により行えることが結果的に議会の価値と比重を高めることになったのである。それはそれぞれの階層が互いの利害を追求し経験を積む中で社会慣習が生まれ、結果的に議会制となつてあらわれたのである。誰かの高邁な理想の下に計画されたものではない。フランス革命が理性による政治の名の下に多くの流血を生んだのとは対照的である。

のことから言えるのは、人間は社会のような複雑で流動的なものを完全に管理する能力はないということである。自分は何かも完全に理解できないのに、それ以上のことを望むのは夢想に過ぎない。制度は、社会の中にある多くの可能性の一つが人の意欲と行動と

偶然の連動の中から具現化したものである。必然的法則的に出来るものではない。

従つて、その社会の持つ可能性の低い制度を移植しても、本来予定されている機能を發揮できないのは当然である。現在、議会制民主主義を採用している国は多いが、本来の機能を發揮しているのは少数である。多くの国の社会が機能不全を起こす可能性を多く抱え込んでいるからである。

我が國も明治になつて議会制民主主義を移植したのであるが、世界的に見れば順調なほうであろう。それでも始まつたころは選挙にからんだ暴力沙汰が絶えなかつた。我が國は島国で日本列島に住む者は同じ日本人であるという意識は早くからあつた。しかし、議会制民主主義では被治者が選挙を通じて統治者を選ぶのであるから、被治者に国政への関心と参画意識がなければならぬ。現実には統治に実際に参画するのは何処でも極く少数であるので、統治者と被治者が厳然と区別され意識の上でも断絶しているところではこの制度は成り立たない。幸い我が國は士農工商の身分制

度の下でもこの断絶はなかつた。

江戸時代の最もポピュラーな芸能である歌舞伎や文楽の題目が、義経・曾我兄弟・忠臣蔵といった武士の物語が中心であるように、統治階級である武士（人口の7%程度）の生き方である武士道の価値観（忠節・信義・誠等）は庶民にも浸透していた。その結果武士の職分意識も浸透していった。職分とは、石高の大・役職の上下はあれ、それぞれが持場で本分を尽くすことにより藩政に貢献しているということである。武士以外では、それぞれの仕事に本分を尽くすことが社会の為になり、意味ある生を送ることになるという意識である。「1寸の虫にも5分の魂」という諺があるように、そのような気概は武士も尊重せざるをえなかつた。この意識があつたから、被治者が統治者でもあるという頭の体操めいた議会制民主主義に比較的スムーズに移行できたのである。

さて、一国内で権力の平和的移行が始まつても、国際間は従来のままで、19世紀は帝国主義の最盛期で、最初の議会制民主主義国英國が最大の植民地所有

国であるのが現実であつた。20世紀に入り、その前半半世紀で二つの世界大戦を経験し、膨大な被害と壊滅的な破壊をもたらす核兵器の登場を経て、戦争による解決は割に合わないということになつて、国際法という一定のルールを作つてお互いが守ることを約束することによつて秩序形成をするのが趨勢となつたのだが、このルールは国内法のようには破つても厳格な罰則の適用はないのが難点である。いわば紳士協定で参加メンバーが信義則を守る場合にはうまくいくが、紳士ならざるならず者がいれば引っ搔き回される恐れがあるシステムなのである。

今回の事態でプーチンが演じているのはこのならず者の役割である。何故そうなるかという原因是ロシアの歴史にある。ロシアが強大化する切っ掛けを作つたロマノフ王朝のピョートル大帝は典型的な専制君主であつて、その伝統が最後まで続く。民主化を求めて起きたロシア革命も結局は共産党の一党独裁と党エリートによる専制に堕して行き詰まり、周辺国の離反でソ連は崩壊し、小さくなつたロシアとして出発せざるを

えなくなつた。一応形は議会制民主主義をとつてゐるが、実態はブーチンの独裁であり、その度合いは年とともに強まつてゐる。このような歴史しか持たないから、社会の諸勢力が言論と選挙を通じて利害を調整して合意形成を図つていくというような時間と手間のかかる議会制民主主義を有効に機能させるノウハウを、社会が持つていなかつても不十分なのである。

西部劇のならず者に通例なのは、ならず者なりにプライドを持つており、自分は尊重されるべきであるという自負心を持つてゐるのに、子分以外はそのように扱つてくれないことに強烈なフラストレーションを感じてゐるというシチュエーションである。ブーチンも同じで、フラストレーションはきらに強い。かつての子分の東欧諸国はあろうことか対ロシア軍事同盟であるNATOに加盟してしまつた。そのうえ前はソ連で一緒で兄弟国と思っていたウクライナまでEU加盟の動きをみせてゐる。どこまで俺をないがしろにすれば気が済むのかといつたところであろう。

客観的にいえば、独立国がその方針に因縁を付けら

れる筋合いはない。俺の方に靡けと/orいうなら、行きたくなるような魅力を示せということである。ところがロシアにはその魅力がないのである。輸出出来るのは武器と石油・天然ガス等のエネルギー資源と農産物で、市場経済の花形民生品の工業力がないのである。宇宙ステーションを運営しているのに不思議なことだが、手間のかかる民主主義運営が苦手なように、時間と労力をかけて市場と付き合い売れる物を作り出すといふような地道さは苦手なのであろう。文化面でもそゝうである。クラシック音楽は有名だが、過去の遺産であるシロシアが本場というわけでもない。寧ろ西欧であろう。ロシア発のポピュラーヒット曲など聞いたことがない。文学でもソルジエニツィン以降出ていない。要するに未来に向けたプラスイメージがないのである。未来といえばITであろうが、ロシアの手掛け有名なのはサイバーテロだけである。

本来ならば魅力作りに努力してシンパ作りに励むべきところを、ならず者らしく手つ取り早く渉ることにした。目論むところは、かつての子分はNATOに入

つてしまつたから流石に手は出せないが、弟分のウクライナならどう振舞つても結局黙認されるだろうということであった。ところが思いのほか抵抗が強く周りも武器支援の助つ人を買って出て膠着状態に陥り引つ込みがつかなくなつたというのが現在の状況である。

問題はこれからである。ウクライナも頑張つていて

がプーチンのロシアも頑張つていて。経済制裁も効果をあげているが予期程度には至つていない。プーチンはならず者であるが気概は持つていてある。プーチンに対抗するには負けないだけの気概をもつていなければならない。この点で支援国の中で独仏には疑念が残る。フランスは第二次大戦の戦勝国の一員であるが、実際は大戦初期にドイツに完敗し全土を支配化に置かれ、その開放は英米軍の力でなされた敗戦国である。戦後も植民地保持に固執しベトナムで負けアルジエリアで負けて手放した。ドイツも同じならず者のヒトラーのやり過ぎで惨憺たる敗戦を喫し国としての大義も失なつた後遺症から抜け出でていない。両国とも武の氣概の点で問題があるのである。米英の関与がなか

つたらプーチン有利に妥協が図られた可能性が高く禍根を残したであろう。その点英國の存在感は高いし情勢についての発信力もある。英國はヒトラーに苦戦しながらも負けなかつたし、戦後の植民地の放棄でも仏よりスマートだった。武の行使に対する気概は歴史に負うところが多いのである。

ならず者は何故制裁されねばならぬのか。ならず者は過去のいきさつに恨みを持ち、被害感情に捕らわれ、被害者を装つた加害行為を行い、その過程で無辜の民が理不尽な被害を受けることを一顧だにしないからである。それからならず者は未来に對して何の希望も示せないからである。

手を振り上げたならず者に言葉は通用しない。言葉の背後になんらかの威力を感じさせなければ。口先だけの平和論は嘲笑するだけである。一線を超えてしまつたならず者には大義名分を確信して相手と同じ様に非情に対決するしかない。ウクライナ問題は総合力ではロシアに分はないのである。西側が気概を持續させてウクライナ国民の未来に繋がる解決になることを希

望する次第である。

我が国への影響についても考えておきたい。我が国はかつて日露戦争勝利で大陸で得た権益を守り拡大しようとして中国と対立し失敗した。時の政権が軍部を支配コントロール出来ないという明治憲法体制の欠陥で国としての統一的リーダーシップがない儘、軍部は対立がどのような国際反響を呼ぶかについて慎重周到な考慮なくエスカレートさせ、日本の権益拡大を好まぬ米国は中国を支援したため、個々の戦闘では勝利するも全体を支配するには及ばず膠着する中、次第に弱い者いじめの国際的レッテルの中孤立し経済制裁で資源の枯渇に苦しめられることとなり、一か八かの真珠湾攻撃を仕掛け局面打開を図つたが国力の差で無条件降伏の完敗を喫した。更に悪いことにヒトラーの最盛期の威勢のよさに目がくらみイタリアを含めて三国の軍事同盟を結んでいたため、ヒトラーと同程度のならず者視に甘んじざるをえなくなつた。ただ一つの成果と言えるのは、戦後のアジア諸国の植民地からの独立である。軍部がこれに何処まで本気だったかは疑問で

ある。独立した諸国と対等互恵の関係を作る気はなく自らの勢力圏としたいだけであつたろうが、植民地の独立を掲げ、一定の活動をしたことは事実である。植民地独立と民族自決は立派な大義名分である。国内で議会制民主主義を敷いている中、植民地からこの主張が出た時は論理的には否定できず、思想的劣勢に立たされ、現地にある程度の政治勢力が育つたときは独立を認めざるをえない。我が国はその芽を作ったわけである。

戦後の我が国の歴史は国際法という信義則を守り忠実に履行することを徹底し、ならず者視された汚名を晴らすことに努力してきた歴史といつてもよい。その努力は戦後70数年たつて報われたことは、ウクライナ問題を巡る各国の論調が我が国を国際協調の重要なメンバービューしてのことからも明らかである。これから出てくる要求はこれまでののような平和的支援に留まらぬ武的支援の要求である。

歴史のある国は何処も栄光だけでなく汚点の歴史を持っている。武の行使に失敗したから以後一切武には

触れないというのは羹に憲りてあえ物を吹くことである。これから想定される事態は台湾のように武的圧力に直面する国から支援を求められた時、見殺しにするのかということである。米国がやるからと逃げれば、隣が火事になりそうなのに知らんぷりするような卑劣な奴と同盟する価値はあるのかということになる。

先に述べた気概が問われる所以である。日本人に気概がなくなつたわけではない。東日本大震災の時、福島第一原発の事故では、1号機から4号機皆故障し、世界の専門家がチエルノブイリ級の災害不可避と見ていた時、吉田所長以下50人の職員は総員退避の指示を退け、身の危険を省みず電源復旧と冷却機能の回復に努めた。これは武士道の最高道徳である「身を殺して仁をなす」の精神と氣概である。これから我が国はこの氣概と精神を武の場面で求められることになる。我が国が大義名分に則り武の氣概（義を見てせざるは勇無きなり）を發揮できる時がならず者の汚名を完全に晴らす時である。

佐藤忠之先生

帯を締め直して肚を括る



去る7月8日の正午前、世間は昼休みに入ろうとしていたその時、衝撃のニュースが全国を動搖させました。国内に戦慄が走り報道関係は騒然となりました。それは元宰相の安倍晋三氏が参院選応援の遊説先で凶弾に倒れたという一報でした。心肺停止のまま緊急搬送、救急救命措置がとられましたが、5時間後には逝去の公式報道がなされました。実際には心臓を襲った凶弾によってほぼ即死状態にあつたそうです。この事件、決して有つてはならない、許されてはならない卑劣凶惡な事件であり、民主主義を無視凌辱した重大な凶悪犯罪がありました。

平和ボケとは一面では幸せですが、国家は現実の平和遵守のために欠くべからざる警備防衛防禦体制の腹帶を締め直し、我々国民一人一人も肚を括る時代に立つていると私は感じています。

哀しく残念な事ですが、凶悪暴漢による理不尽な凶行は私達の身の周りに現実として潜伏存在します。

我々はこの事件からも否応なしにそれを認め学ばなければなりません。平和に見えても私達の周りにはいつ起こるかわからない、いつでも起こりかねない暴力が潜んでいる事を、改めて肝に銘じなくてはならない、そんな現実の中に私たちは生きています。

しかし、かと言つて神経質になり過ぎてビクビク恐れながら日々の生活を送るのは宜しくありません。然るべき姿とは言えません。この世に生を受けた以上、平等に死を迎えるのが宿命ですから、いつかは誰もが死を迎えます。この死生観をしつかりと認識して日々を送る姿が、我々の武道で言う所の肚（はら）を括る事だと私はとらえています。

武道の稽古練習にしても演武や競技の技の探求のその根本にあるものは何か?と言う命題を改めて考えたいと実感しています。そもそもが武道の独自性も実用

性もそこを根本に据えた上に培われてきた事を見つめ直しています。

アンケート

自分の足と努力で収集判断するしかないのかもしれない！とコロナ禍を通して学習しました。

『コロナウイルス感染症の流行で最も変化したと感じることをお聞かせください。（私生活上の変化等）』

（回答）

コロナ蔓延禍のもとで体感した新しい発見。それはオンライン作業によって効率化できる仕事の多いことです。正直なところPCオンチの私は科学技術の進歩に素直に脱帽！子供の頃、TVやアニメや外国映画の中に見てきた光景がまさに現実化している事に驚きましたね。

ただ一方で「情報」「報道」と言うものに對して疑問や懸念も感じています。コロナ禍の実態報道にしろワクチンの効果の実際や或いは副反応などの正確な情報など、事実を知りたいのに何が本当なのかわからぬい、何が真実なのか？それが見えない現実に「報道」と「情報」の不確かさ、偏りを肌で感じています。むしろ疑問を持つてしまいました。自分の目と耳とで、

酒井進之介先生

自由寄稿文



3年前の2019年4月、ロシアへ2回目の指導に伺った時のこと、モスクワでの2日間セミナーを終えてから夜行列車に乗り、ウクライナ国境近くにあるベルゴロドという街で更に2日間のセミナーを行いました。とても美しい街で初日に3コマ、2日目に2コマを行い、それぞれ40～60名の方が参加されました。

セミナーは順調に進み、活気のある稽古を2日間行うことができました。セミナーで受けをして頂いたのは、現地指導者のアシスタントをされていた若手の長身の方でした。良く稽古をされている方で、お互い初めて手合わせしましたが安心して思い切って投げることができた相手でした。

最終日の最終コマは手首取りに対する形稽古の内容から、組み付かれた場合の我々が行う乱取の返し技に進み、形と乱取に共通するポイントを行つておりました。そのコマの本当に最後の場面でのことです。後ろから片

手を両手で組み付かれた場合の技を行った際、「next, grab seriously, firmly（次はしっかりと強く持つてください）」と受けの方に伝えました。自分は少々気が緩んでいたのだと思います。単に強く持たれるだけでしたらまだ良かつたのですが、その方も最後は試したかったのだと思います。時には微妙に足を動かして良い位置を取ろうとしながらがつちり持つてきました。内心そういう意味ではないのに（・・・）と思いながらも言い出したのは自分です。これまでに多少繰り返し稽古しきた捻り返しと脱力を使いながら4～5回目ぐらいで最後は何とか（違う方向に崩して）倒してくれました。3～4回は失敗しました。その時は手首から前腕にかけて肉と骨が離れるような感覚を味わったことが記憶にあります。

翌日、指導者に連れていたロシア式のサウナ「バーニャ」での体験は興味深いものでした。木の枝を束ねたようなものを高温の水につけ、それを身体に何度も叩きつけるのです。これをさんざんやつた後で冷たい水風呂に飛び込みます。セミナーも全日程が終了したこともあります。その時の爽快感は忘れることができません。

来年またぜひお会いしましよう、とモスクワとベルゴロドの指導者から声をかけられお別れしました。

翌年から始まつたコロナ・パンデミックと2022年2月に始まつたウクライナ戦争はその機会を全て奪いました。一期一会を大切にこれからも進んでいきたいと思います。

アンケート

『コロナウイルス感染症の流行で最も変化したと感じることをお聞かせください。（私生活上の変化等）』

（回答）

コロナ禍における学生合気道の活動制限には大変厳しいものがありました。授業もその多くがリモートで行われるようになつた結果、学生がキャンパスに集まらなくなり勧誘活動もままならず、また部活動自体の制限と相まって存続の危機となつた合気道部も複数ありました。今もそれらの大学へ毎週回りながら活動存続の手助けを継続しております。先ずは現役部員の状況に耳を傾け、稽古では共に汗をかき、そして部の方向性について語り合う姿勢を心掛けるようにしてしています。時間をかければ結果も自ずとついてくることを信じています。

一方で一般の道場運営においては、コロナ禍となつて以来、少年部を10名までの少人数制クラスに編成し直して月40コマ前後を設け、毎月末までに翌月分の予約をして頂く形に改めました。

その結果、保護者とのコミュニケーションの機会が増えたこと、また稽古開始前までは誰が来るのか分かっているため、指導者側も準備がしやすく、参加者に合わせた稽古内容を提供できるようになつていったように思います。

「変化を止めることはできないが、変化の先に立つことはできる」とは好きな言葉の一つなのですが、大切なものを残していくために何を辛抱して、何を変えていかなければならないかを考えることは今までに必要なことだと思います。

宇田川哲哉先生

学生諸君への期待



一、聖賢に成らんと欲する志無く、古人の事跡を見、
辯も企て及ばぬと云ふ様なる心ならば、戦に臨みて
逃るより猶ほ卑怯なり。朱子も白刃を見て逃る者は
どうもならぬと云はれたり。誠意を以て聖賢の書を
読み、其の处分せられたる心を身に体し心に驗する
修業致さず、唯個様の言個様の事と云ふのみを知り
たるとも、何の詮無きもの也。予今日人の論を聞く
に、何程尤もに論ずるとも、处分に心行き渡らず、
唯口舌の上のみならば、少しも感ずる心之れ無し。
真に其の处分有る人を見れば、實に感じ入る也。聖
賢の書を空く読むのみならば、譬へば人の劍術を傍
観するも同じにて、少しも自分に得心出来ず。自分
に得心出来ば、万一立ち合へと申されし時逃るよ
り外有る間敷也。（南洲翁遺訓「第三十六条」）

令和の御代に入つてから程なく、世界は動乱の時代に

突入しているようだ。

令和元年十二月に中国武漢より発生したといわれる新型コロナウイルスは、忽ち世界に拡大し、各国は非常事態宣言を発し、外出禁止措置、入国禁止措置を行い、混乱に陥った。日本も例外ではなく、政府自治体による緊急事態宣言や蔓延防止措置に基づく外出自粛要請により、在宅勤務やオンライン授業が進み、人々の集いの場が制限された。大学生諸君も入学したにも拘わらず、キャンパスにも入ることが出来なかつたのは、貴重な学生生活を取り上げられたにも等しい事であつたろう。

また、本年（令和四年）二月二十四日には、ロシアのプーチン大統領は開戦宣言をしないまま、軍事作戦と称してウクライナに対して侵略戦争を始めた。それに対し、北大西洋条約機構（NATO）などの西側諸国（日本も含む）によるウクライナへの軍事支援及びロシアへの経済制裁もあり、ゼレンスキーア大統領率いるウクライナ国民が善戦している。欧米をはじめとする所謂民主主義国家と中露をはじめとする所謂権威主義国家の睨み合いが続いているようだ。我々日本人にとつても対岸の

火事ではない。厄介な隣人（国）がいることを忘れてはならない。

さて、このような動乱期に於いて、各大学合気道部に所属する学生に期待するものとは何であろうか。

それは、各々が高い志をもつて武道（武士道）の修行に邁進していくことである。即ち自らの命を懸けてでも戦う気概を養うことともいえよう。しかし、これは何も全ての学生諸君に、武器を持つて戦闘状態に参加すべし、というような意味ではない。日々変化する社会生活の中で、夫々の立場に於いて力を發揮することを可能にする精神力の基礎となるものを、四年間で醸成していくのである。

一人一人の学生が、クラブ活動の中での実技の修練、精神の修養を続けていくことによつて、氣力を充実させていく。他の部員との切磋琢磨によつて、次第に肉体が鍛えられ、精神が高まつていく。それは、お互いに敬愛の念を持ち合うようにもなるであろう。

四年間に亘り集中して稽古ができる環境があるのは、大学生の特権と云つても差し支えあるまい。

ただ、そのような鍛錬は初めからできるものではない。特に新たに入部してくる部員の多くは、受験勉強を経て、運動不足になっている。闇雲に運動させるのではなく、徐々に稽古に体を慣れさせ、心身を整えていくように配慮することが大切だ。

具体的には、正しく座り呼吸を整えることから始めるといい。姿勢を正し、腹式呼吸法によりゆっくりと息を吐き、下腹丹田の一点に意識を集中させる。できるだけ深い呼吸を意識することが肝要である。

呼吸は、鼻、口と肺の間だけでするものではない。呼吸により酸素を中心とした空気が取り込まれると血液となり、心臓から動脈を伝って毛細血管にまで伝わるという、全身を使ってのものであると考えるとわかりやすい。

※呼吸（の真の目的）は、単に息を吸つて吐く肺呼吸（外呼吸）だけでなく、毛細血管を通じて酸素と食事で摂られた栄養素を身体を構成する約六十兆個の細胞に運んで燃焼（細胞呼吸）、その時に発生するエネルギーが生命活動の源になつている。

出典『病まないための細胞呼吸レッスン』根来 秀行著（ハーバード大学、ソルボンヌ大学医学部客員教授）

呼吸法ができてみると自律神経が整つてくる。そうなると精神状態も安定してくることになる。

次に、呼吸に合わせて体を動かし、基本動作を体に覚えさせる。受身などをすると、体に刺激を与えるとともに体力をつけることができる。呼吸を使って下腹丹田を意識しながら肉体を鍛えていくことは、胆力の強化にも繋がる。

ある程度の体力がついてきたときには、自ら望んで武道を志した者であれば、実技を修練し、会得しようとい

う欲求が更に高まつてくる。そのときには、精神の修養にも身が入つてくるものと思われる。少しづつ自信もついてくるだろう。

学生諸君の今後益々の精進を期待したい。

令和四年七月記

『コロナウイルス感染症の流行で最も変化したと感じることをお聞かせください。（私生活上の変化等）』

（回答）

国内外の友人知人と出会い、交流する機会が、非常に少なくなつた。そろそろ元の生活に戻していくべきであろうと感じている。

アンケート

谷繁強志先生

真理を追求する心



○ご挨拶

この度、退任された志々田先生に代わり、皆様と共に合気道を稽古して参ります谷繁です。二〇一六年より早稲田大学合気道部で監督をしております。中学生の時に柔能く剛を制すことに憧れて柔道を習いましたが、現代柔道では、中々柔能く剛を制すのは難しいものです。果たして合気道は正に力に勝る柔らかさを身につける武道です。柔能く剛を制し、弱能く強を制す境地に達するよう精進を心懸けております。

○守破離

恥ずかしながら、最近この「守破離」という言葉を耳にしました。長年感じていたことが、この三文字で表されていることを知りとても感動しました。

習い事は、まず型から入り、その型（型にはめるということの意味もありますので、形ではなくこの型の字を使うことにします）を徹底的に「守る」ことで基本を身につけます。

次に型に慣れてくると自分なりのものに修正して行きます。これが型を破ること、「破」です。特に武道は、相手がいる相対運動であるので、自分自身の体格や体力と相手の体格や体力を比較して、最適な行動を取らねばならず、型を応用し、自分なり、相手なりに修正せねばなりません。型を破るにはしっかりとした型を持つていなくてはなりません。当初身につけた型は基本とも言うべきものであり、本質を必ず含んでいます。この本質を理解することが大切です。本質は変えずに修正する。これが型破りです。

型を破ることで、独自の手法、新たな型を創造することになります。本質を備えた独自の型ですので、当初のものとは違うものであり、当初の型や指導者から独立して行く、すなわち「離れる」ことは、独り立ちすることと考えられます。

「守破離」は、武道における修行の過程に非常に親和性が高いものです。様々な学びや修練においても同様ですが、忘れてはならないのは、物事の本質すなわち真理を理解し、真理を追求し続けることです。真理を理解するために指導者の教えを守り、真理を更に追求するためには型を破り、真理に到達するために独り立ちし離れて行く、真理を追求する心を持ち続けたいものです。

アンケート

『コロナウイルス感染症の流行で最も変化したと感じることをお聞かせください。（私生活上の変化等）』

（回答）

人との付き合い方です。ノミニケーションが人との付き合いの中心であると信じてきた身にとつては、ノミニケーションに頼らずに人と付き合う方法を未だ模索中です。

三、 加盟校紹介

関西学院大学

連盟誌50周年

関西学院大学体育会合氣道部　主将松田佳貴

このたびは、連盟誌が第50号の発行を迎えるれられましたこと、心よりお喜び申し上げます。全日本学生連盟の関係者の方々におかれましては、平素より多大なるお力添えを賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、この連盟誌が記念すべき50回目の発行を迎えたいま、関西学院大学体育会合氣道部では、もうすぐ6年目を迎えるようとしています。未曾有の災禍により、一度は危ぶまれた部員数も、幸にして今年度は新たに15名の新人部員を迎えて入れ、総勢36名となりました。今もなお、新型コロナウイルスは猛威を振るっていますが、弊部では少しずつ元の活動が出来るようになつてまいりました。前代の60代・61代は新型コロナウイルスの影響を直に受け、さまざまな制限がある中で試行錯誤を繰り返しました。そのような努力もあり、現在私たちはコロナ禍以前以前に近い形で活動できています。し



かし、そんなコロナ禍以前の活動を知っているのも、現四年生である私たちのみとなってしまいました。下級生はコロナ禍での活動しか知らず、コロナ禍以前の活動についてよく尋ねてきます。「以前はこうであった」「元々こうしていた」と伝える一方で、私自身は主将として活動していく中で、完全にコロナ禍以前のようには戻そうとはしていませんでした。

今までの活動を振り返ってみると、“伝統”についてよく考えさせられた3年間であつたなと感じています。これはコロナ禍以前の生活を知っている私たちの学年だからこそ共有できる悩みでもあると思っていました。コロナ禍で雑然とした部内の制度を、一から建て直して新しいものを作るのか、それとも元通り再建するのか。正直に言うと、元通りにしてしまう方が簡単ではあります。しかし、転換期に当たる今、変わるものと変わらないものを丁寧に選別しながら“伝統”を継承する必要があります。決して楽な手段は選ばずに考え方、時には柔軟に方向を変えられる点こそ関西学院大学体育会合氣道部の強さだと私は信じています。

拙文ではありますが、最後までお付き合いいただきありがとうございました。全日本学生合氣同連盟の一層の発展を祈念しております。

部紹介

- | 部紹介 | |
|--------------------------------|--|
| 一、部の正式名称 | 関西学院体育会合氣道部 |
| 二、創部年 | 昭和三十五年 |
| 三、部役員 | 部長 上村敏之
監督 大原隆志 |
| 四、部員数三十六人 | |
| 五、稽古時間 | 月曜日 十三時～二十分～十四時五十分
火曜日～金曜日 十一時～十二時三十分
土曜日 十時～十二時
十三時～十四時三十分 |
| 六、道場の名前 | 関西学院大学合氣道場 |
| 七、道場の広さ | 百八畳 |
| 八、コロナ禍の現在 | 従来・コロナ前 |
| 九、春季長期オフ | 一月 冬季長期オフ |
| 十、春季合宿前練期間 | 二月 春合宿前練期間 |
| 十一、合気道大阪武育会本部 | 合気道大阪武育会本部 |
| 十二、合気道大阪武育会本部 | 合気道大阪武育会本部 |
| 十三、総合演武大会 | 総合演武大会 |
| 四月 春合宿..中止 | 三月 春合宿..中止 |
| 五月 新人勧誘 | 四月 新人勧誘 |
| 六月 関西学生合氣道競技大会、六月 関西学生合氣道競技大会、 | 五月 新人合宿 |
| 七月 春学期打ち上げ稽古、七月 春学期打ち上げ稽古、 | 六月 関西学生合氣道競技大会、 |
| 八月 夏季長期オフ | 七月 春学期打ち上げ稽古、 |
| 九月 夏合宿..中止 | 八月 夏合宿前練期間 |
| 十月 升級昇段審査会、 | 九月 夏合宿 |
| 十一月 全日本学生合氣道大会 | 十月 升級昇段審査会、 |
| 十二月 関西学生合氣道新人競技大会 | 十一月 全日本学生合氣道大会 |
| 十三月 新人競技大会 | 十二月 関西学生合氣道新人競技大会 |

京都産業大学

上級生になつて 主将 馬庭 知也

二〇二二年四月、対面での新歓祭が催され、前年と比べて多くの一回生や、二回生も入部しました。それから四ヶ月近くが経ち、四回生から二、三回生への幹部の引き継ぎが徐々に始まっています。後輩も増え、自分たちが、より部を引っ張っていく立場であるということを感じます。

新入部員は合氣道初心者ばかりですが、彼らに受け身や技や基本動作を教えていると、自分が新入部員だった時とは違った視点から、それらの基礎を見つめることができます。入部当初は基本動作の動きの理屈が分からず、ただ先輩方に言われた通りに体を動かし、背筋や膝の曲げ伸ばしや細かい足の動き等も、それらの動きがどのように技で活きてくるのかということを理解していませんでした。しかし、先輩方からご指導いただいたことを新入生に教えていると、基本動作のこの動きはこの技において重要



であるのではないかと気づくことがあります。この動きが上手くできれば、技で相手に効かせられるのではないかということを考え、自分自身も、こだわりや意図を持つて基本動作を鍛錬する機会が増えているように感じられます。後輩に教えるということは、自分にとつても学ぶ機会であり、自分が入部してから何度も繰り返し練習してきた技や基本も、まだまだ上達する伸びしろがあると思いました。そのような点で、教えるということも、自分自身についての一つの練習方法であると言えます。勉学でも、人に教えられるくらいになつて初めて理解できていると言われますが、合氣道で人に技を教えることは、勉学のように技への理解を深めるということだけでなく、全く新しい発見もあります。そういう意味では、基礎を含めた一つ一つの技に終わりはなく、どれだけでも追究できるということを感じました。

自分が指導する立場になるということは、技術の成熟や人間性の部分においても指導するに相応しくある

必要があり、少なくとも後輩から見て、そのような先輩でなければならぬと思います。そのような自覚は、自分を先輩たらしめる戒めとなっています。普段の練習や、練習以外での場面でも、自らの举措に気を配る必要があるということを、自分の先輩方から学ぶことができます。

自分は先輩として、幹部として、一人の人間としてまだ未熟です。しかし、後輩に技を教えるということや、幹部として仕事をこなすことを通して、中心的に部を引っ張るという責任感を持ち、人として成長していきたいと思います。

部紹介

- 一、部の正式名称 京都産業大学体育会合氣道部
二、創部年 昭和四〇年
三、部役員 師範 松尾 正純先生
顧問 林 隆先生
部長 菅原 宏太先生
- 四、部員数 二〇名 男子一三名 女子七名
五、稽古時間 月・金曜日 一七時～一九時
水曜日 一三時～一五時
六、道場の名前 京都産業大学総合体育館練習室二
七、道場の広さ 六〇畳
八、年間行事
コロナ～現在 従来～コロナ前
一月 一月 鏡開き師範練習
二月 二月 春合宿
三月 三月
四月 四月 合氣道講習会
卒部式

五月 新入生歓迎の宴
六月 本部合宿
七月 夏合宿
八月
九月
十月 新幹部襲名披露の宴
十一月 幹部送別の宴

近畿大学



主将作文

主将 大門亮嗣

こんにちは。近畿大学体育会合気道部58代主将の大門亮嗣と申します。

昨年10月の全日本学生合気道競技大会が終わり、年度末に58代の主将に任命されました。現在は、4回生5名、3回生1名、2回生2名、1回生8名の合計16名で活動をしています。

この部活での経験を振り返って感じたことは、自分の成長には様々な人の助けがあったということです。

入部当初は、小学生ぶりの武道の環境に刺激ばかりの日々でした。合気道自体も初心者であつたため分からぬことだらけの中、たくさんの先輩に受け身など基礎からみつちり指導をしていただきました。そんな優しい先輩方の大会で奮闘する姿を見て、とてもかつよくてこんな選手になりたいと心の底から憧れの気持ちを抱いたことを記憶しています。

上手くなりたくて先輩方の背中を追いかけて、どんなに夏の辛い練習にも必死に食らいつきました。何度も挑んでは投げられ返されることの連続で、1年生の夏合宿は短い私の人生でトップクラスに厳しい一週間でした。しかしながら自分の中では先輩に挑み、同期と競いながら心身ともに成長できた一年間だったと思います。

明るい内容にしたいので、コロナ禍の二年間は省略とさせて頂きます。

そして昨年末に主将に任命されましたが、当時はやる気こそありましたが組織をまとめることに実感を持てず過ごすことが多かつたように記憶しています。しかしながら、辛い練習に向き合う姿勢、分からぬなりに必死に練習に励む1回生の姿を見て、主将として練習を頑張るのは当たり前で、それよりも部員の熱量・努力が絶対に無駄にならないように環境を守ることが主将の役割だと考えるようになりました。

二年間ぼっかり空いてしまった分、卒業した先輩や哥子の方だけでなく本部道場の先生方の力を借りて技術面や後輩との関わり方等も成長できたと思います。

また、同期も入部当初は10名程在籍していて名前を覚えるのに精一杯だったのが今では5名と半数になってしまった。しかしながら、一人一人に長所があつて私には到底出来っこないこともこなしてくれる頼りがないのある仲間です。

周りの人々に助けてもらってばっかりで、あの時憧れた先輩のようになれているかは分かりません。ですが最後の全日本大会で納得した結果で学生生活を終えられるように、同期と3年半の間過ごせたことが自分にとって今後の宝物になれるように、私なりに悔いのないようにならざるを得ません。

部紹介

一、部の正式名称	近畿大学体育会合氣道部
二、創部年	昭和四十年
三、部役員	
顧問	成山哲郎
部長	佐々木敏文・井筒敏昭
監督	林真貴子
副監督	伊藤博樹
四、部員数	十六名
五、稽古時間..	正規練習
火・木・金曜日	十六時四十五分～二十時
水曜日	十六時四十五分～十八時三十分
六、道場の名前	近畿大学合氣道部道場
七、道場の広さ	百二十八畳
八、年間行事	
コロナ禍..現在	従来..コロナ前
一月	一月
二月	卒業生送別式
三月	卒業生送別式
三月	春合宿

五月	四月	五月	四月
六月	五月	六月	五月
七月	六月	七月	六月
八月	七月	八月	七月
九月	八月	九月	八月
十月	九月	十月	九月
十一月	十月	十一月	十月
十二月	十一月	十二月	十一月
関西学生合氣道	新人競技大会、卒部式	関西学生合氣道	新人競技大会、卒部式
新入生歓迎会	卒部式	新入生歓迎会	卒部式

國士館大學



コロナ禍を乗り越えて　主将　藤田　慶成

私が二年生の時から今に至るまで大会や講習会、他校との合同練習会といった合気道の活動は、ほとんどが制限、中止でした。それは、行事だけでなく、日々の稽古もです。そういう制限された中で、いかに國士館大学合気道部の伝統を後輩に継承していくかを考え続けた主将としての取り組み、考えについて、書かせていただきたいと思います。これを読んで、共感して下さったり、私について知つてもらえたなら幸いです。

私が主将に任命されたとき、一つ上の先輩からの引継ぎは何もありませんでした。それは、コロナの影響で二年前から、ほとんどの活動が出来ていなかつた為です。そのため、日々の稽古の内容や大会や昇級審査の運営方法といった全ての主将業務を行う時、何もわからない状態から手探りで準備を進めていく状態でした。そのような状況で日々、様々なことを決めていくことが主将になって最初の仕事だったと思います。しかし、そういう状況だったからこそ、今まで出来なかつたことに挑戦する

ことが出来ました。

そういったほとんどが何も引き継がれない状態で苦労したため、後輩がそういった苦労をしないように、なるべく運営に参加してもらうようにしました。それによって、私達が引退しても後輩たちだけで部活の運営が出来るようになります。

関係は、コロナ以前の活動が出来るように伝統を次世代に繋げることが出来たのではないかと思います。

私個人の主将としての取り組みとしては、式段への昇段が挙げられます。合気道部では、就活の際に履歴書に書くことを目的として初段取得を目指している部員が多くいます。そのため、大体の人が初段を取得すると、それ以上の段を取ろうとしなくなります。私が一年生の時に当時の主将が取ったのを最後に誰も取っていないため、このままでは、後輩たちが初段以上を取ろうとは思わなくなるのではないかと考え、稽古の後輩への指導以外の空いた時間で練習して式段を取得しました。

私の主将としての任期は、コロナ禍で失いかけた伝統を復活させ、後輩に繋げるための期間だったと思います。

同期や後輩には様々なことで迷惑をかけたり、力を貸してもらつたりしました。また、時に厳しく指導することも多くありました。そのような頼りがいの無い主将についててくれた、力を貸してくれた同期、後輩に本当に感謝しています。

主将としての活動は、部員が協力してくれなかつたら一つとして上手くいかなかつたと思います。直接言うのは恥ずかしいのでこの場を借りて感謝の言葉を書き、それで主将作文を締めようと 思います。

「國士館大学合気道部のみんな、いつも力を貸してくれてありがとうございます」

部紹介

一、部の正式名称	国土館大学合氣道部	五月	春季講習会	五月	春季講習会
二、創部年	昭和三十八年	六月	昇級昇段審査会	六月	昇級昇段審査会
三、部役員	顧問・監督 師範 成山哲郎 大森竜一	東日本学生合氣道	東日本学生合氣道	審判講習会	審判講習会
四、部員数	三十二名 男子十五名・女子十七名	河野寛一 部長	河野寛一 木曜日 十一時三十分～十三時三十分	東日本少年合氣道 競技大会	東日本少年合氣道 競技大会
五、稽古時間	水・金曜日 十八時～十九時三十分 木曜日 十七時三十分～十九時	八月 九月 九月 九月 九月 九月 九月 九月	東日本青少年 合氣道競技会 東日本学生合氣道 競技大会、 昇級昇段審査会 昇級昇段審査会 夏季合宿 東日本合氣道 競技会	東日本青少年 合氣道競技会 東日本学生合氣道 競技大会、 競技会 昇級昇段審査会 競技会 東日本合氣道 競技会	東日本青少年 合氣道競技会 東日本学生合氣道 競技大会、 競技会 昇級昇段審査会 競技会 東日本合氣道 競技会
六、道場の名前	世田谷キャンパス・MCH二階柔道場、 町田キャンパス・第二柔道場	十一月	全日本学生合氣道 競技会	十一月全日本学生合氣道 競技会	十一月全日本学生合氣道 競技会
七、道場の広さ	世田谷キャンパス..六十畳 町田キャンパス..百畳	十二月	東日本合氣道 競技会	東日本合氣道 競技会	東日本合氣道 競技会
八、年間行事	コロナ禍..現在 従来..コロナ前 寒稽古 昇級昇段審査会	三月	全日本合氣道 競技会	昇級昇段審査会	昇級昇段審査会
九、年間行事	寒稽古 昇級昇段審査会	三月	東日本合氣道 競技会	昇級昇段審査会	昇級昇段審査会

上智大学

主将作文

奥長あかり

まずは自己紹介をさせていただきたい。私は上智大学合気道部第61代主将であり、文学部フランス文学科の三年生だ。今年の7月に幹部交代を経て主将に就任したため、まだ主将になつてから日が浅いが、実は合気道部に入つてからも日が浅い。

私は大学二年の夏に、同じ仏文科の友人一人と共に合氣道部に入部した。

大学一年でもなく、二年の春でもなく、二年の夏という中途半端な時期である。それでも、我が部から（特にO Bから）、我々は救世主のように迎えられた。というのも、当時の部員は引退済みの四年生が三名、三年生が二名で、そのうち実質的に活動しているのは、OGとして来てくださる四年生一名と、主将である三年生一名の計二名のみという廃れっぷり。春の勧誘で一人の新入部員も迎えることができず、まさに廃部寸前だった。

六十年という歴史を背負った我が部が、そのような悲惨な状況に陥ってしまった理由の一端には、やはり新型



コロナウイルスがある。大学三年生の我々が一年生のころ、コロナはまだ流行り始めたばかりで授業はすべてオンライン、私も入試と、年二回の健康診断以外では学校に行つたこともなかつた。当然、以前のように部活やサークルの勧誘を受ける機会はない。

しかし、我々にとって、そして我が合気道部にとっても幸いだつたことに、早速翌年には部分的ではあるが、他の大学に先駆けて対面での授業が再開された。だが、当時は大学二年生とはいえ、キャンパス歴・学校行事歴は一年目。そのため、春の一斉勧誘のイベントの存在など知らずに素通りし、ようやく学校に慣れてきた月にそろそろ部活を始めてみるか、と、前々から目をつけていた合気道部のSNSで体験のアボを取り、友人を連れて押しけけ、二人で入部に漕ぎつけた、というのが合気道部存続の、そして我々の入部の経緯である。

さて、ここまで読んでくださった皆さんが疑問に思われるであろうことは、部活やサークルを始めるとしても、なぜいきなり合気道部を選んだのか、ということだと思う。

その答えは二人とも、超個人的で、超利己的なものだ。別段、以前から武道をやっていたとか、廃部の文字のちらつく合気道部を哀れんだために、入部を決めた訳ではない。

まず私は、警察官になりたいから、である。

合気道をやっている皆さんならご存じかもしないが、警視庁には全国の都道府県警察の中で唯一、女性の術科訓練の選択肢に合気道がある。裏を返せば警視庁の女性警官にしかないマイナー武道、ということになるが、その分柔剣道と違い、大学の部活でもほぼ全員初心者と聞いて敷居が低く感じられたために、あらかじめ合気道部に焦点を定めて、ほぼ入部気分の体験に訪れた。

対して私は連れられた友人の方は、警察官なんて泥臭い職業ではなく、有名企業に勤めるキラキラOLを目指していたために、目標には天と地ほどの差がある。

しかし、部活というものには同じ魅力を感じていた。これも皆さんご存じのところとは思うが、そして身も蓋もない話になるが、体育会系の、しかも武道系の部活となると、就活で有利なイメージを与えることができ、い

わゆる「ガクチカ」の種にもなる。

ただ、我々が今の今まで、我が合気道部を単なる就活の道具としてしか見ていなかつたかというと、決してそうではない。ぜひ、先ほどお話しした、現役部員二名、活動部員は現役一名OG一名の現状を思い出していただきたい。部活には、私が知っているだけでも、主将、主務、会計、涉外、納会（飲み会の運営）、合宿、各種委員会などの仕事がある。いくらコロナ禍で行事が減つてゐるとはいっても、上記の人員では確実に手が回らない。

加えて、僅かな現役部員たちも、最下級性としてのびのび活動していたところにいきなり部活動は全面休止、新顔も見ないまま気づけば自分たちがトップになつてしまつた訳だから、既に細々と再開していた部活に、コロナ禍ということを承知で入部を決めた我々より、余程の戸惑いがあつたであらうことは想像に難くない。

しかし、それを立て直した我々の苦労も大変なものがあつた。

字数の都合上、その苦労の詳細は省かせていただくが、文学部の学生がどんな隙間時間を使つてすら、授業中も

惜しまず内職をしなくては收拾が付かないほどだつた、ということはお伝えしておきたい。

そして「手のかかる子ほどかわいい」とは言うが、これだけ努力して立て直した合気道部は、もはやかわいい「我が部」となり、この一年間で友人共々、合気道の魅力に取り憑かれてしまつたことは間違いない。

加えて、友人の必死の新歓の甲斐あって、今年度はなんと六名もの新入部員を迎へ、着実に部の再建に向けた一步を踏みだすことができた。新入部員は全員一年生、我々は三年生ということで、ひとつ下の学年の部員を迎えることはできず、まだまだ苦労もあるが、OBの方々のお力も借りながら、何とか二人で幹部をやつているところだ。

部紹介

一、部の正式名称	上智大学体育会合気道部
二、創部年	昭和三十六年
三、部役員	師範 千田務 練身会最高師範
四、部員数	十名 部長 奥田ひかり
五、稽古時間	月曜日 十八時～二十一時 水曜日 十八時～二十一時 金曜日 十八時～二十一時
六、道場の名前	上智大学体育館地下柔道場
七、道場の広さ	不明
八、年間行事	コロナ禍の現在 従来..コロナ前
一月	一月
二月	冬合宿 二月 春合宿
三月	三月 上明演武会
四月	四月 神田明神演武、フレマン

フレマン

五月 O B 総会
六月 審査

五月

六月 審査

六月

七月 審査

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

八月

九月 錬身会大会

九月

十月 学連演武大会

十月

十一月 審査

十一月

十二月 審査

十二月

七月 上南戦

七月

八月 夏合宿

専修大学

主将作文

秋本壯太

主将に代わりまして、六十四期副将の秋本が筆を取らせていただきます。私は考え方をすることが好きです。この部に入つてからというのも「つよさ」とは何かについて考えます。これを考えるきっかけになったのは、我が部のO.B.で、現在は師範をされている堀越師範のお言葉でした。「武道をする一つの目的は“つよく”なること」と師範は時折おっしゃいます。しかし、「一言」「つよい」と言つても、その用いられ方は様々です。単純な腕っぷしの“つよさ”もあるでしょう。他方、辛い出来事に耐えうる“つよさ”もあります。素直に大別するなら、肉体的な“つよさ”と精神的な“つよさ”でしょうか。肉体と精神が別のものと言いたい訳ではありません。むしろその関係は“つよさ”においても親密であるように思われます。病気に対する“つよい”身体が無いと、部屋に寝たきりになり、精神も疲弊していくこ

とも想像できます。

“つよく”なるために何が必要でしょうか。“つよい”人は何をもつて“つよい”とされるのでしょうか。ひとつには“力”が必要だと思います。筋力・胆力・忍耐力などこちらも様々です。では力をつけるにはどうしたらよいか…。探究の道は果てしないですね。さらに問題に思うものがあります。それは暴力についてです。暴力それ 자체を否定するつもりはなく、それが必要な場合があることは常識としてあります。そもそも、武道も相手の命を奪うような、生々しい一面があつたことは事実です。これを忘れていいはずがありません。

ここまでつらつらと書いてきましたが、自分としては考えなければならないことであると感じています。理由は様々ですが、実際に武道に身を置く一人としてそう感じます。頭で考えてきましたが、日々の稽古、生活でも“つよさ”や“力”を実感することはあります。専修大学合氣道部は今年度新入生を迎えた六十五期目となりました。ここまで続いたことには、諸先輩方の“つよさ”をひしひしと感じます。

「現代における武道とは」とは語るつもりはないですし、自分にはまだ身に余る題であるように思います。“つよさ”に関して、まずは日々の稽古での実感を大切にしながら、探究を続けていきたいと思います。

拓殖大学

武道と合氣道

拓植大学主将 石川 泰希

本日このような寄稿する機会をいただけたため、今一度私の根幹にある武道精神と合氣道について改めて考えてみたいと思います。



私は幼少の頃から父の影響もあり武道に触れることが多くありました。初めて修めたのは極真空手になります、この極真空手とは大まかに説明しますと顔以外の打撃を用い勝敗を争う競技であります。極真空手の印象としましてはスポーツ性と武道の精神を程よく汲み取つたものであり、大会などといった競技性を持ちながらも精神面ではスポーツ性、エンターテイメント性には偏らず、武道の精神である相手を敬い礼節を重んじることを重視する傾向が強くあると感じました。当時の私はこのあり方こそが武道であると信じ込んでおりましたが、中学生に上がる際に同じ空手でも伝統派である、日本空手協

会を並行して学ぶようになり、ここでは型を基調とした稽古が基本とあり、他者との試合などによる勝敗より自らの精神性をいかに鍛えるかに趣が置かれた指導を受けました。私は、双方の学びを受け自分で中で吸収したところ、片方の流派のみの技術より双方の技術等を汲み合わせることでより良い動きができるようになり、どちらの流派にも異なる大変素晴らしい技術があるので実感いたしました。しかし、双方の流派は考え方などの違いにより相容れぬ関係性であったことに對し私は大変悲しく、もつたいたく感じたことを覚えております。

その後、高校では空手部に所属し、ここでは今まで学んできた双方の空手とも異なり、とても競技性が強く、いかに体を鍛え瞬発力を高めて、素早くポイントを獲得するかということに趣のおされたものでした。また、私の通っていた空手部は県内でも有数の実力があり、毎日の稽古がとても厳しかったことを今でも覚えております、そのような環境下で三年間稽古を行い、私は結局、相手を圧倒する強さとは筋力や骨格の強さ、瞬発力の良さから生まれるのだと考えるようになりました。しかし、

ある機会に現千葉県合氣道理事長の寺本先生とお手合を頂きました。その際、寺本先生は空手のどんな技でも構わないから攻めてみろと仰り、私は全力で顔面へ突きを飛ばしました。しかし、気が付くと私は畳へ転がされており、全く理解が追い付かず、立ち上がり蹴りを飛ばすとも同様で、ここで初めて私は武道または武術を体感できたかのようを感じました。私はここでの感動が忘れられず大学では合氣道を学びたいと思い、故塩田先生の在籍していた拓殖大学で合氣道部に入部し、今に至ります。

私はどの武道や武術が技術的にまたは精神的に優れていると考えることはあまりしませんが、合氣道の他者を認める和・調和精神には武道としての真義があるのではないかと思います。またこの考え方は、17条の憲法の中にある和を以て貴しとなすという精神と同じであり、古来より受け継がれてきた、日本人の根本にある精神性をも表しているのだと理解しております。私は今後もこの精神を胸に刻み稽古に励んでいきたいと思います。押忍

部紹介

一、正式名称	麗澤会体育局合氣道部
二、創部年	昭和三十四年
三、部役員	師範 芝田裕二 部長 辻善行
四、部員数	十名 男子六名、女子四名
五、稽古時間	月・火・木・金曜日 十八時～二十時 土曜日 十時三十分～十二時三十分
六、道場の名前	第一体育館武道場・合氣道場
七、道場の広さ	約二百三十畳
八、年間行事	コロナ禍～現在 従来～コロナ前
一月	春合宿
二月	先輩送別会、春合宿
三月	連盟合宿
四月	新歓
五月	昇級昇段審査

六月 新入生歓迎会
七月
八月
九月 夏合宿
十月 紅陵祭、連盟
十一月 演武大会
十二月 昇級昇段審査
十一月
十二月 昇級昇段審査
十月 紅陵祭、連盟
十一月 演武大会
十二月 昇級昇段審査
九月 養神館大会
十月
十一月
十二月 昇級昇段審査

中央大学

『合気道部への入部を後悔していますか?』

中央大学合気道部主将 石田 龍之介

もともと合気道に興味があり、部の雰囲気や先輩の人柄に惹かれ合気道部に入部した。

合気道部を通じて多くの人、出来事に触れる過程で人としての経験値はかなりの程度上がったが、同時に合気道部を選ばなかつた私についても考えずにはいられなかつた。合気道部でなくとも価値ある経験はできたのではないか。もし誰かに尋ねられれば「なるほど確かに」と思う節が自分にあるように思えたからだ。

しかし、仮に他で代替ができるような経験しか得られないものであれば、早々に見切りをつけ合気道部を離れる選択を取つていたかもしれない。そうしなかつたのは紛れもなく合気道部だからこそその魅力や、この部でしか得られない経験があったからなのだ。

1年生で入部した当初は右も左もわからず、とにかく



上級生の動き真似をして日々の稽古に付いて行くので精一杯だった。体力も今より当然なく、忍耐力もなかつた。4年主将を中心とした上級生は優しくも、ときには厳しく指導して下さった。2年生になると真似できる技の種類は増え、精度も上がっていたが、より厳しく指導されることができなくなつた。パンデミックで約半年間稽古ができなかつたことは関係なく、翌年には上級生となり教える側に回る。その覚悟を徐々に持ち始めた。下級生時代はまさに下積み時代だった。

3年生は、多くの新入部員に恵まれたが、喜びよりも不安が勝つた。不安の素は己の実力不足にも関わらずそれとは向き合わず、後輩の前では虚勢を張つていた。

しかし、4年生になるとそんな振る舞いの愚かしさを痛感した。先輩の皮を被つても、実力は2年生から殆ど成長していなかつたのだ。不安から張つた虚勢はその場のぎにしかならなかつた。格好をつけるよりも中身の充実を選ぶべきだったのだ。虚勢ではなく実勢を得る手段は、合気道部であれば稽古である。私の稽古に対する姿勢は3年生の頃と明らかに変化した。技の一つ一つを

丁寧に咀嚼し自分の中に落とし込む作業は、下級生の頃の型の模倣とは違いとても時間と根気を要する。だがそれがとても愉しく充実している。

今私は、主将として部に近くすことが与えられた最後にして最大の使命だと考えている。近くすとか、使命とか書くとともに大きさに聞こえるが、先述の通り真摯に稽古に向き合い、先輩が私にしたように真剣に後輩を教えるということだ。

本題に戻ろう。ここでは述べられないような失敗もしあし、退部を考えたこともあつた。しかしそれでも「入部したこと後に悔などあらう筈がない」と私は断言できる。

部紹介

一、正式名称	中央大学合氣道部
二、創部年	昭和三十三年
三、部役員	師範 宇田川哲哉
四、部員数	三十七名
五、稽古時間	月・水曜日 十三時～十四時三十分 火・木曜日 十三時～十五時 金曜日 十八時～二十時 土曜日 十七時～十九時
六、道場の名前	第一体育館合氣道場
七、道場の広さ	百十畳
八、年間行事	コロナ禍～現在 従来～コロナ前
三月	二月 一月
三月 連盟合宿	二月 春季合宿

四月	新歓演武	五月	強化合宿	四月	新歓演武	五月	強化合宿	五月	強化合宿	六月	三大学合同稽古、	七月	夏季合宿	八月	新歓演武	九月	夏季合宿代替稽古	十月	夏季合宿	十一月	白門祭演武、	十一月	全日本学生合氣道演武	十二月	後期昇段審査	十二月	夏季合宿	七月	前期昇段審査	八月	新歓演武	九月	夏季合宿	十月	夏季合宿	十一月	白門祭演武、	十一月	全日本学生合氣道演武	十二月	後期昇段審査
----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	----------	----	------	----	------	----	----------	----	------	-----	--------	-----	------------	-----	--------	-----	------	----	--------	----	------	----	------	----	------	-----	--------	-----	------------	-----	--------

五大学／二十大学

帝京大学

合氣道を始めて

帝京大学合氣道部 四年 鈴木龍



きっかけは、新しいことに挑戦しようともつたからだ。そこでなぜ合氣道だったのか。それは、元々両親がやつていて、かつこいいなと思っていたからだ。しかし、存在だけを知つていて、動画などでしか見たことがなかった。そのため、部活の見学を見に行つた際に、先輩方の技をみて、再び「かつこいい、私もできるようになりたい」と思った。こうしたことから、私は合氣道に入部することに決めた。

合氣道部に入部してたくさんのものを得ることができた。まずは、もちろん合氣道の技だ。最初の入部したのところは、相手の力を利用するというより力に頼るなどしていて、なかなか、上手く技を相手にかけることができなった。しかし、稽古を重ねるごとに少しづつ一つ一つの技の原理を理解して、入部したころよりも技をかけ

ることができるようになった。また、技を覚えるごとに
よつて合気道を学ぶことがあります樂しくなつていつ
た。

次に得たものは、人との縁だ。私は、入部するまでは
同じ学科の同年代としか仲良くできないだろうと思つ
ていた。しかし、入部して師範、先輩方、同年代、OB
といったようなたくさんの人と関わることがあつた。さ
らには、ある一つ年上の先輩と仲良くなつたおかげで、
その先輩と関わりがあつた友達や後輩と話す機会があ
つた。その結果、たくさんの先輩、友達ができ充実した
学生生活を送ることができた。このように合気道を始め
たことによつて、たくさんの縁に恵まれた。

さらには得たものは、部長の経験だ。私は、三年生のと
き、部長を務めることになつた。務めていた一年間は大
変だつた。しかし、その分たくさん経験を得ることができ
た。例えば、稽古内容を考えることだ。私たちの稽
古は、大学の体育館柔道場で行つてゐるため、コロナ禍
であつた一年間は、外部の方を呼んで稽古を行うことが
できませんでした。そのため、普段は、師範の方などに

教わつて いたことを部員たちで行わなければならなか
つた。そこで私は、どのように稽古を進めればよいか、
師範やOBに聞くなどし、稽古内容を考えた。また稽古
は、私が中心となつて行つて いた。このようなことから、
人に何かを教えるや合気道の難しさなどを学ぶことが
できた。

以上が合気道部に入部して学んだことだ。今回紹介し
たこと以外もたくさん学んだことはある。まだ、合気道
から学んだことはたくさんあると思うため、これからも
続けていこうと思つて いる。

部紹介

一、正式名称	帝京大学理工学部合氣道部	六月	昇級昇段審査
二、創部年	平成二年	七月	新入生歓迎会
三、部役員	師範 北村長榮	八月	部員旅行、夏合宿、
四、部員数	七名 男子六人、女子一人	九月	部員旅行
五、稽古時間	月曜日 十七時～十九時	十月	全日本学生合氣道 演武大会
六、道場の名前	帝京大学体育館柔道場	十一月	学園祭
七、道場の広さ	六十六畳	十二月	昇級昇段審査、忘年会
八、年間行事	コロナ禍～現在 従来～コロナ前	十一月	全日本学生合氣道 演武大会
五月	五月 新入生歓迎会	十二月	学園祭
四月	四月	九月	昇級昇段審査、忘年会
三月	三月	十月	全日本学生合氣道 演武大会
二月	二月	十一月	学園祭
一月	一月	十二月	昇級昇段審査、忘年会

東京大学

主将作文

佐藤弘基

コロナ禍になつて3年目に突入しました。東大では始めての2年間は演武会や合同稽古など、外部との交流の機会を得ることができなかつたものの、この1年ほどで、昨年の連盟演武会を始め他大、OBOGとの交流や大学の演武会など、部活らしい活動を行うことが出来ました。日常を一度失つてその掛け替えのなさを体感した後に、少しずつでも取り戻すことが合出来たので嬉しさは殊更でした。

部活の醍醐味は稽古だけでなく、様々なイベント事を通して人間関係を育み、仲間との絆を深めていくこともあります。社会的には後者の重要性は感染症対策に劣つていると見做されてしまい、合気道団体としては充実しても、部としては無味乾燥となつてしましました。私の代がコロナ前を知る最後の代だつたと言うこともあり、当時の部の活動を、コロナ前を知らない次の代に伝えることが我々の責任だと考えてこの1年を過ごしてきました。



もちろん、マニュアルを渡して引継ぎをすることは出来ます。それでも、実体験を伴わないと形式ばかりで文化を引き継いだとは言えないでしょう。「お酒が入って賑やかなこのタイミングで部歌を歌う」とかはマニュアルだけでは伝わらないでしょう。そうした脈々と受け継がれた同じ文化を経験したということが、時代は違えど、同じ団体に帰属して頑張りあつた仲間なのだと意識を生み出してOBOGや現役を繋ぐのだと思いま

とつても難しい時が続くようになります。だからこそ、連盟と言う場が、大学が集つて、助け合い、刺激を与えてお互いを高め合えるような場となり、今後の新しい大学合氣道を築き上げてほしいと思います。

部活に対する大学の理解もあつてか、規模は小さいながらもイベント事を前述のように復活させることができました。コロナを気にしないで済む時が早く訪れ、後輩には部として活動を楽しみ、充実した合氣道ライフを送つてほしい限りです。

しかし、まだ日常が正常に戻ったとは言い難く、コロナ禍を境に生活の仕方や部活に対する価値観も変わりました。これからは、以前の部活動の再興と同時に、この変わった社会に順応して、取捨選択と新しい部活動を築くことも求められると思います。まだまだどの大学に

部紹介

一、正式名称	東京大学運動会合氣道部	
二、創部年	昭和二十九年	
三、部役員	永世師範	田中茂穂
	名譽師範	稻葉稔
	師範	山田高廣
	師範代	堀下直人
	コーチ	朽名英明
四、部員数	十七名	能智正博
五、稽古時間	平日	十二時十分～十二時五十分
		十八時五十分～二十時五十分
六、道場の名前	駒場キャンパス第一体育館武道場	本郷キャンパス七徳堂
七、道場の広さ	百八十二畳	
八、年間行事		
	コロナ禍（現在）	従来（コロナ前）
一月	寒稽古	寒稽古
二月	二月集中稽古	二月二月強化合宿
三月	春集中稽古	春合宿
四月	新歓演武会	新歓演武会
	新入生歓迎会	新歓旅行
五月	五月祭演武会	五月祭演武会

六月	六月集中稽古	七月	六月強化合宿
七月	夏集中稽古	八月	夏合宿
八月	秋集中稽古	九月	秋合宿
九月	連盟演武大会	十月	連盟演武大会
十月	駒場祭演武会	十一月	駒場祭演武会
十一月	冬集中稽古	十二月	冬合宿
十二月	冬集中稽古	一月	冬合宿

東京医科歯科大学

主将作文

東京医科大学合気道部 主将 平田祐馬



東京医科大学合気道部は、令和4年度は医学科・看護学科合わせて16名の部員が学内の武道場にて週3回の稽古を行つております。コロナ感染拡大の影響で、令和2年4月から令和3年10月末まで部活動を休止しておりましたが、令和3年11月からは週2回の稽古を再開し、今年度からは以前と同様の週3回の活動に戻すことができました。毎回の稽古の際には、部長塚原清彰先生のご紹介により、多くの先生方や先輩方のご指導をいただきしております。1年半以上のブランクの後の稽古再開につき、諸先生方のご尽力によりご指導を賜ることができ、各部員が力をつける体制を整えていただけました。各部員、授業、実習、試験などに追われる毎日ではありますが、恵まれた環境の中気持ちの良い汗を流せる

ことに感謝しながら、大会で力を発揮できるよう稽古に取り組んでおります。

令和2年春先から始まつた世界規模のコロナ感染の急激な拡大は医療危機をもたらし、世界の人々の健康状態や生命、生活に大きな影響を与えました。感染は拡大と縮小を繰り返し、令和4年7月現在、日本では第7波の真っ只中であります。多くのかけがえのない命を救うため、世界の医療従事者達は感染に対し奮闘しておりますが、私達東京医科大学の学生も、将来の医療を支える者として日々の勉学に励みつつ、部活動内容を感染状況に合わせ対応しております。コロナ感染拡大後、大会や審査会への参加を見合わせることが続いており、誠に申し訳ございません。一日も早くこのパンデミックが収まり、世界中の人々が心配せずに健やかに生活できる日が訪れる事を願つて止みません。この困難を乗り越え、日本学生合気道連盟に加盟されている他大学の皆様と道場でお会いし、対戦できる日が待ち遠しいです。最後になりますが、日本学生合気道連盟に加盟されていらっしゃる皆様のご健勝とご発展をお祈り申し上げま

す。東京医科大学合気道部一同、日本学生合気道連盟の活動協力に尽力をして参りますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

部紹介

一、正式名称	東京医科歯科大学
二、創部年	昭和四十七年
三、部役員	部長 塚原清彰 監督 鎌田浩亮
四、部員数	十五名 男子三名、女子十二名
五、稽古時間	火・木曜日 十八時～二十時
六、道場の名前	土曜日 十時～十二時 記念館地下道場
七、道場の広さ	五十畳
八、年間行事	従来～コロナ前
コロナ禍～現在	
一月	一月
二月	二月
三月	三月
卒業式	卒業式
五月	五月
四月	四月
新歓	新歓、関東学生合気
道競技大会	

六月 稽古開始
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月
幹部交代
六月 新入生勧誘会、
七月 関東学生合氣道競技
八月 升級審査会、幹部交代式

富山大学

継承と継続

富山大学体育会合気道部第51期主将高橋蒼

令和4年度より富山大学体育会合気道部第51期主将を務めています、高橋蒼と申します。今回は「継承と継続」と題しまして現在の富山大学体育会合気道部の現状について主将作文の寄稿をさせていただきました。

昨今のコロナ状況は収束の目途が立たず、感染者の増減を日々知らせるニュースに辟易とともに、ものはや日常の一部になつていると言えるほど我々の「コロナ付き合い」も長い時間が経つたと感じられます。そして同時に、この時間は我々の合気道に対する熱意を薄れさせるには十分すぎたと感じます。

今年は昨年に比べ部活動に対する大学の規制が弱まり、活動の幅は広がったといえるでしょう。しかし、繰り替えされる規制に縛られ活動制限を重ねた結果、そこにつながるのは部活動を行う「意義」について疑問



を持つ部員達の姿でした。私も今の代になつて最初のころは大いに悩みました。「活動時間」と「勉強時間」を天秤にかけ、どちらが有意義であるかを問う日々を繰り返すほどに、私の中で部活動に対する熱意が薄れていたのは事実です。そんな中私を引き留めてくれたのは忙しい時間を削つて部活動に来てくださる先輩方の姿でした。悩みつつも活動を続ける中で先輩方の姿を見るうちに、私が合気道を始めた「きっかけ」への考えに至りました。魅力を感じた技の数々、それを演じる先輩方の姿、そして部活動に限らず気さくに接してくださった人柄、それらが合わさつて合気道の「良さ」を実感し、私が合気道をやつてみたいと発起したこと思い出しました。そして同時に、ここに部活動の本質があるのでないかと考えました。今までには引き継いだものをいかに絶やさないように次の代へ受け継ぐか、いわば「継続」の方法にとらわれていました。その結果、部活動がそこにあればそれは右から左に移動させるだけで継続の目的は達成されてしまうことから、部活動における中身の重要性に気付く

ことができず熱意を失う結果につながつたのだと思いります。しかし今一度根本に立ち返り、自分が合気道を始めるに至つたきっかけを思い出すことができれば、そこから目標を設定し稽古に励むことができると思します。つまり部活動への熱意と中身を充実させるためには自分の目標を見定める必要があり、そのための「きっかけ」を様々な形で次の代に与えていくことこそが「継承」なのだと思います。

私よりも下の代はOBを含めた先輩方とのつながりが薄いことや行事の経験不足等から、上記で述べたような「きっかけ」に関する思い出が曇氣であるかもしれません。しかし私が先輩方の姿に憧れたように、今度は私自身が後輩に対してきっかけを作つていけるような姿を目指し、これからも稽古に励んでいこうと思います。

部紹介

- 一、部の正式名称 富山大学体育会合氣道部
- 二、創部年 昭和四十六年
- 三、部役員 師範 長井忍
部長 宮二志
監督 名古屋孝之
- 四、部員数 九人 内現役五人
- 五、稽古時間 火・金曜日十八時三十分～二十時三十分
土曜日 十四時三十分～十六時三十分
- 六、道場の名前 富山大学武道場
- 七、道場の広さ 百四十畳
- 八、年間行事
- | | | |
|-------------|----|--------|
| コロナ禍の現在 | 従来 | コロナ禍 |
| 一月 寒稽古 | 一月 | 寒稽古 |
| 二月 | 二月 | 5大合同稽古 |
| 三月 合宿、審査 | 三月 | |
| 四月 新歎、学館前演武 | 四月 | |
| 五月 | 五月 | |

六月 北国体育大会	七月 合宿、審査	八月 審査	九月 東京演武	十月 金大合同稽古	十一月 納会
七月	八月	九月	十月	十一月	十二月

明治大学

主将の役割

明治大学体同連合気道部主将　波平龍人



このコロナ禍で我が合気道部だけでなく他団体も相当な苦労をしているだろうと勝手ながら想像している。そして改めて、主将の役割、視座を問い合わせ直すいい機会だつたとも考えている。なぜかというと時代がどう転ぶかわからない中での運営は常に暗中模索だからだ。新歓活動による部員の確保、現部員のケアなどやらねばやらなければいけないことはコロナ禍で一層増えたと考える。しかし、捉え方を変えると今回の一件は部の結束を高めるチャンスなのではないか。コロナ禍でどう稽古を行うか考え、どうこの部を存続させていくか。おそらくこれから一生考えないだろう。主将としても一部員としても考える視座が上がったのではないかと思っている。

そして運営を行っていくには現役部員だけでは力不足

足だ。監督をはじめOBの先輩方にはたくさん頼つてしまつたのでご迷惑をおかけしたと思っている。だが主将

として合気道部を牽引してく上で先輩方のご助力にはとても感謝しているし、日々いくべきことがあることがたみを感じている。

例えば、週末稽古のご指導、稽古会の開催など上達の機会をたくさん設けてくださっている。それだけではなく部の方針に悩んだ際も親身になつて相談に乗つてくれるので非常に助けられている。大学の助成金だけでは貢えないので金銭的な面でも多大なご助力を頂いているのでこちらも身が引き締まる思いで稽古に臨む必要があると思つた。

こうした諸先輩方のお力を借りて部は存続していくつてゐるし、創部50年以上の我が部を自分の代以降に引き継いでいかないと日々考えている。自分が部の舵を取るのはもうあと数か月だが、我が部がこれから何十年も続くような雰囲気作りをしていきたい。

最後にコロナ禍で合気道界隈は苦境に立たされてい

く必要があり、私は全力を注いでいきたいと思っている。

部紹介

一、部の正式名称	明治大学体同連合氣道部
二、創部年	昭和五十三年
三、部役員	師範 奥山師範代
四、部員数	十六人 男子十二人、女子四人
五、稽古時間	土曜日 十二時三十分～十四時三十分 平日 日曜日 十三時～十七時
六	七 道場の名前 明治大学体育館柔道場
八、道場の広さ	不明
九、年間行事	コロナ禍～現在 従来～コロナ前
一月 新年稽古会	一月 新年稽古会
二月 通常稽古	二月 追いコン
三月 升級昇段審査	三月 春合宿
四月 新歓	四月 新歓

五月 新人戦	六月 春季関東大会	七月 通常稽古	八月 夏合宿	九月 通常稽古	十月 全国大会	十一月 全国大会	十二月 東大会	十一月 秋季関東大会	十二月 後期納会
六月 春季関東大会	七月 昇級昇段審査	八月 合宿予備稽古	九月 夏合宿	十月 全国大会	十一月 秋季関東大会	十二月 後期納会	十一月 東大会	十二月 後期納会	十一月 新人戦
七月 昇級昇段審査	八月 合宿予備稽古	九月 夏合宿	十月 全国大会	十一月 秋季関東大会	十二月 後期納会	十一月 東大会	十二月 後期納会	十一月 新人戦	六月 春季関東大会
八月 合宿予備稽古	九月 夏合宿	十月 全国大会	十一月 秋季関東大会	十二月 後期納会	十一月 東大会	十二月 後期納会	十一月 新人戦	六月 春季関東大会	七月 昇級昇段審査
九月 夏合宿	十月 全国大会	十一月 秋季関東大会	十二月 後期納会	十一月 東大会	十二月 後期納会	十一月 新人戦	六月 春季関東大会	七月 昇級昇段審査	八月 合宿予備稽古
十月 全国大会	十一月 秋季関東大会	十二月 後期納会	十一月 東大会	十二月 後期納会	十一月 新人戦	六月 春季関東大会	七月 昇級昇段審査	八月 合宿予備稽古	九月 夏合宿
十一月 秋季関東大会	十二月 後期納会	十一月 東大会	十二月 後期納会	十一月 新人戦	六月 春季関東大会	七月 昇級昇段審査	八月 合宿予備稽古	九月 夏合宿	十月 全国大会
十二月 後期納会	十一月 東大会	十二月 後期納会	十一月 新人戦	六月 春季関東大会	七月 昇級昇段審査	八月 合宿予備稽古	九月 夏合宿	十月 全国大会	十一月 秋季関東大会

横浜国立大学合気道部

主将作文 今村 宝

横浜国立大学合気道部主将、4年の今村です。当部は石黒先生やOBOGの先輩方の丁寧な指導のもと、部員同士で気付きを共有し技を磨いていきます。一人一人が自分のペースで成長していくことが出来ます。

さて、僕が合気道部に入部した理由なのですが、きっかけは両親から護身術を身に付けてみてはと提案されたからです。中高6年間文化部だった僕は、大学でも運動部に入らないと一生やることはないとも思い、心身を鍛えるのと運動不足解消も兼ねて入部しようかと考えました。2019年の4月に学内の柔道場で先輩方が綺麗に受け身をとっているのを見て、僕はとても感動しました。自分も稽古に出ていればこんな風になれるのだと思い、入部を決心しました。

入部した後、基本的に最初の半年間は受け身と基本動作の練習でした。合気道以外の武道、更にはスポーツ全

般にいえることだと思いますが、通常初心者は基礎練習です。中高文化部だった僕は、「もう受け身は一通り覚えたのに、どうしてまだ技に入らせてもらえないのか」という思いが一層強かったです。準備体操で脚に体重を乗せるのがとても苦痛でした。一時は稽古に行くのが憂鬱にもなりましたが、脚力がついてきたおかげでその思いもしばらく稽古に通い続けていたら消し飛びました。準備体操と受け身に慣れてきたら、技の習得もしやすくなりました。

コロナ禍で2年生の間は活動がほとんど出来ませんでしたが、1年空いても準備体操や受け身は身体に染みついていたため、身体が多少鈍っていても直ぐにブランクを取り戻せました。このように稽古の成果を実感できた感動は、大変貴重なものでした。3年生の時は、準備体操も苦痛じやなくなり、むしろ楽しく取り組めるようになりました。

先生の教えとして、「合気道は文字通り、『氣』を合わせること」とあります。合気道は自分一人では成り立たず、相手と呼吸を合わせるからこそ成り立つものだとい

うことです。どんなに受け身や動作が完璧でも、相手の動きに合わせられなければ技は決まりません。思えば今までの自分は速く技の練習に入りたいとか、コロナ禍で1年間活動出来ないことに腹を立てるなど、自分勝手でした。しかしながら、日々の稽古や1年間の我慢を通して心身ともに精進してこられました。後輩達にも相手と呼吸を合わせることがいかに大切か、自分が学んできたことを伝えていきたいです。

部紹介

一、部の正式名称	国立大学法人横浜国立大学体育合
二、創部年	平成十五年
三、部役員	顧問 中村達夫准教授 師範・監督 石黒行雄（横浜国立大学 体育会合気道部OB）
四、部員数	主将 今村宝 六名 男子五名、女子一名
五、稽古時間	水・金曜日 十九時三十分～二十一時 (横浜国立大学内柔道場)
六、道場の名前	土曜日 十七時～十九時(久里浜道場) 横浜国立大学内柔道場 久里浜道場(横須賀市立神明中学校 武道館道場)
七、道場の広さ	
八、年間行事	八十六畳

コロナ禍～現在	従来	コロナ前
一月 寒稽古	一月 寒稽古	二月 寒稽古
二月 寒稽古	二月 寒稽古	三月 新入部員育成のための 指導方法の練習
三月 新入部員育成のための 指導方法の練習	三月 追いコン	四月 新歓活動、入部体験会
四月 新歓活動、入部体験会	四月 新歓活動、入体 験会	五月 前期定期昇級・昇段審査
五月 前期定期昇級・昇段審査	五月 前期定期昇級・ 昇段審査	六月 新入生歓迎会
六月 新入生歓迎会	六月 新入生歓迎会	七月 暑中稽古
七月 暑中稽古	七月 暑中稽古	八月 暑中稽古
八月 暑中稽古	八月 暑中稽古	九月 暑中稽古
九月 暑中稽古	九月 暑中稽古	十月 全日本養神館気
十月 全日本養神館気	道総合演武大会	十一月 後期定期昇級
十一月 後期定期昇級	十一月 後期定期昇級	十二月 寒稽古
十二月 寒稽古		

早稲田大学

主将作文

早稲田大学主将 安藤翔



早稲田大学合気道部では、富木合気道という流派の合氣道の稽古に取り組んでいます。富木合気道では、演武と乱取いわゆる試合の2つが競技として存在していますが、我々は両者を切り離すことは決して行わず、表裏一体の関係にあることを念頭に置きながら、日々稽古しています。演武で体得した技術が乱取に活かされ、乱取で得た知見が演武に活かされるといった形で、両者を通じ、自分のやろうとしていること・やっていることが嘘偽りのないものなのかを検証する楽しみがそこにはあります。例えば、演武でやっている技を乱取でやろうとしても、まったくからないといたことがよくあります。このようなことが起こることは、たいてい演武の受がある程度受けてくれていることが原因です。演武では明確に受と取が決まっており、いきなり受が技に抵抗したり、反撃したりすることはないので、技もかかりやすいです。一方で、乱取は「取が乱れる」と書きます。つまり、どちらも技を

かける

ことになり、自分が技をかけようとした瞬間に生まれる隙を狙つて相手も技をかけてきたり、自分が想定しているように動かなかつたり、そう簡単には技がかかるません。技がかからなかつたときは、自分の技術がニセモノであることを受け止め、修正することが必要です。

我々の稽古はその繰り返しになります。

さて、コロナ禍も3年目になりました。思うように活動ができなかつたり、新入生の加入に苦労したり、各団体同じような経験を乗り越えて今日に至るかと思います。この学生連盟においても、例年通りの活動を経験できず、様々な苦労や苦悩があつたかと思います。そんな中でも、今年も連盟誌の発行や演武大会を企画してくださっているということで、委員の皆様にはこの場をお借りして、ご尽力に感謝申し上げます。コロナ禍で失われたものの一つに、「大学間の横のつながり」が挙げられると思います。

早稲田大学合気道部は、これまでの関係の有無を問わ

ず、流派を超えて多くの皆様と交流をしたいと考えております。お互いの合気道を知ることで、各自の流派の良さを改めて知ることができると考えるからです。団体同士ではなく、個人単位でも構いません。興味がある学生がいらっしゃれば、お気軽にご連絡ください。」

部紹介

- 一、部の正式名称 早稲田大学合氣道部
二、創部年 昭和三十三年
三、部役員 師範 志々田文明、
 師範 佐藤忠之
 部長 加藤尚志
 監督 谷繁強志
四、部員数 二十三名 男子十六名、女子七名
五、稽古時間 月～金曜日 十六時三十分～十九時
 土曜日 十五時～十八時
六、道場の名前 早稲田キャンパス十七号館合氣道場
七、道場の広さ 百六十八畳
八、年間行事 従来のみ
 一年 寒稽古
 二月 連盟合宿
 三月 春合宿、二十大学合同稽古
 四月 五大学合同稽古、新歓
五月 関東学生合氣道新人大会、新入生歓迎会

六月 関東学生合氣道競技春季大会
七月 前期納会、昇級昇段審査
八月 夏合宿
九月 関東学生合氣道競技個人選手権、昇級昇段審査
十月 早慶合氣道定期競技大会、国際大会
十一月 関東学生合氣道競技秋季大会
十二月 昇級昇段審査、後期納会

四、特別企画

特別企画

一、「コロナに対して一言お願いします。」

ります。

・拓殖大学

2019年冬に中国の武漢で発生したとされる
る新型コロナウイルスは、2022年の今日におい
ても未だに日本や世界中で猛威を振るっています。
こうした状況下で十分に感染対策を講じ、できるだ
け高い水準で活動を維持していくかが重要ではない
かと考えています。同時に、一日も早い収束でコロ
ナ禍以前の生活に戻れるよう願うばかりです。

コロナは部の存続を脅かす大変な事態ではあり
ましたが、第60代と第61代の先輩方から繋いで
いただき、現幹部の62代では「大会への参加」と
「部員の増員」に最高の兆しを感じています。
まだまだ予断を許されない状況と、何をするにも
あまたの工夫を要しますが、「当たり前に練習が出
来るありがたさ」を改めて噛みしめる機会になつた
と考えています。

・中央大学

和解しましょう。

・上智大学

コロナ禍で以前とは異なる価値観や生活
を強いられる中、これから部活の在り方を
模索しながらの稽古は苦労もありますが、
そんな中だからこそ、昔とは違う新たな時
代を創つていけるのだという思いもあつた

・帝京大学

2年間返してほしいけど、色々学べたありがとう！

・東京大学

もう十分です。

・東京医科歯科大学

パンデミックが收まり、他大学の皆様と対戦できる

日を心待ちしております。

うばかりです。

・早稲田大学

早く終息してください。

・富山大学

よく言われることは「コロナだから仕方がない」です。実際、規制がある以上は勝手に行動することは適切ではありません。しかし、どうにもコロナに屈した気がして、聞いて気持ちのいい言葉でありません。もっと快い言葉で会話できるような、そんな状況になることを今はただ願うばかりです。

二、「コロナ禍で何か特別な練習をした等ありましたら

お聞かせ下さい。」

・関西学院大学

2022年春 オンライン筋トレ・ミーティング・
技研究

2021年春 道場比一人、マスクあり非接触練習
道場比三～四人、マスクあり短時間
練習等

・明治大学

大変な世の中ですが一緒に頑張りましょう。

対面での稽古が難しかった時期にはオンライン
で構えや基本動作の理論を学びました。

・上智大学

・横浜国立大学

コロナ禍が一日も早く収束することを心から願

・拓殖大学

オンライン形式でのミーティングを実施し、長らく会えていなかつた部員同士でのコミュニケーションやモチベーション維持を図りました。

- ・東京大学
オンライン筋トレの実施（2020年夏～秋ころ）
- ・富山大学

オンラインでの実施はありませんでしたが各自で普段の稽古内容の中から一人でもできるよう一人稽古をおこなっていました。

コロナ禍初期の全く活動ができていない時期に実施しました。

筋トレに詳しい部員の仕切りで、普段の稽古では行わないようなメニュー（プランクなど）を行いました。

- ・明治大学
オンライン筋トレ

- ・中央大学
オンライン筋トレ

コロナ禍初期の全く活動ができていない時期に実施しました。

筋トレに詳しい部員の仕切りで、普段の稽古では行

わないようなメニュー（プランクなど）を行いました。

- ・横浜国立大学

マスク着用で稽古を行うため、息の切れる四股踏みなどを行った後、呼吸を整える目的で実施しています。

- ・早稲田大学

オンライン筋トレの実施

- ・帝京大学
特ないです

加盟校連絡先

加盟校連絡先一覧

大阪商業大学合氣道部	577-0036	大阪府東大阪市御厨栄町 4-
1-10		
金沢大学体育会合氣道部	920-1164	石川県金沢市角間町
関西福祉科学大学合氣道部	582-0026	大阪府柏原市旭ヶ丘 3 丁目
11 番 1 号		
京都産業大学	603-8047	京都府京都市北区上加茂本
山		
体育会合氣道部		
近畿大学合氣道部	577-0805	大阪府東大阪市宝持 3-33-35
国士館大学合氣道部	195-0052	東京都町田市広袴町 844
上智大学体育会合氣道部	102-8554	東京都千代田区紀尾井町 7-1
成城大学合氣道部	157-0066	東京都世田谷区成城 6-1-20
専修大学体育会合氣道部	214-0033	神奈川県川崎市多摩区東三
田 2-1-1		
大正大学合氣道同好会	170-8470	東京都豊島区西巣鴨 3-20-1
拓殖大学麗澤会	193-0085	東京都八王子市館町 815-1
体育局合氣道部		
中央大学学友会	192-0393	東京都八王子市東中野 742-1
体育連盟合氣道部		
帝京大学理工学部合氣道部	320-0351	栃木県宇都宮市豊郷台 1-1
天理大学体育総部合氣道部	632-0032	奈良県天理市杣之内町 1050
東京大学運動会合氣道部	113-0033	東京都文京区本郷 7-3-1
東京医科大学	160-0023	東京都新宿区西新宿 6-1-1
体育会合氣道部		
東洋英和女学院大学	226-0015	神奈川県横浜市緑区三保町

富山大学体育会合気道部	930-0887	富山県富山市五福 3190
明海大学合気道部	279-0014	千葉県浦安市明海 1 丁目
明治学院大学 体育会合気道部	108-0071	東京都港区白金台 1-2-37
明治大学体同連合気道部 1-1	101-0062	東京都千代田区神田駿河台
山梨学院大学 体育会合気道部	400-8575	山梨県甲府市酒折 2-4-5
横浜国立大学合気道部 常盤台 79-1	240-8501	神奈川県横浜市保土ヶ谷区
早稲田大学体育局合気道部	169-0051	東京都新宿区西早稲田 1-6-1
全日本学生合気道連盟 2-3 日本武道館学生クラブ内	102-0091	東京都千代田区北の丸公園

歴代幹部名簿

1期(昭和34年)	亀井静香	東京
2期(昭和36年)	若狭 博	中央
	尾崎 駿	東京
	倉田 出	東京
3期(昭和37年)	小林昭彦	中央
	小暮 登	東京
4期(昭和38年)	柳奧和浦	中央
	大場 勉	東京

吉岡卓也	拓殖	副
小沢 真	委	
川上太一	中央	
山本柳二	拓殖	委
6期（昭和40年）		
7期（昭和41年）		
芹田利昭	專修	
金子正勝	明学	
相原伝次	副	委
飯塚征毅	中央	
早稻田	会	
会		

8期	(昭和42年)	西野充	東京
工藤弘道	早稻田	中央	副委
増田芳久	明学	会	副
小林正行	専修	涉	副
堀田武治	明学	会	副
9期	(昭和43年)	川辺順一	明学
久和原凡生	専修	小林茂	成城
田中明彦	中央	浜口清人	早稻田
森美邦明	中央	河内永	拓殖
日本	企	大塚誠一	企

藤平忠則	福本強	吉田淳一	竹内芳人	玉井英夫	千葉一彰	勝亦	藤本藤二	中央	明学	拓殖	東京	成城	日本	企	企	總	會	副	副	副	委
1期 (昭和45年)																					
佐々木均	佐々木均	川口永一	川口永一	加来健一	加来健一	眞貝栄	眞貝栄	藤野泰男	藤野泰男	松尾隆	松尾隆	東京	東京	記	記	涉	涉	会	会	副	副
日本	日本	早稻田	早稻田	成城	成城	明学	明学	日本	日本	日本	日本	日本	日本	企	企	企	企	副	副	副	副

12期（昭和46年）	石川和夫	早稻田	大久保律雄	拓殖	小出豊	明学	中田英昭	東京	田下啓一	専修	吉野隆
相坂謙悦	中央	拓殖	吉田秀一	日本	松井明	成城	吸地重雄	中央	堀英博	明学	鈴木達次
13期（昭和47年）	宇田悦貴	拓殖	立花英昭	桜美林	平井敏信	明星	平沢純	成城	山内正雄	拓殖	根本雄一
権代憲策	中央	専修	佐藤雄司	成城	森田泰弘	日本	森田泰弘	専修	蟹江良一	中央	東京
白鳥幸敏	明治	拓殖	市川雅康	成城	難波秀記	日本	竹内忠洋	東京	赤泊英哉	中央	小谷康幸
14期（昭和48年）	15期（昭和49年）	16期（昭和50年）	17期（昭和51年）	18期（昭和52年）	19期（昭和53年）						
副委	副委	副委	副委	副委	副委						
熊坂栄	小出英雄	吉野隆	江口和親	渡辺明仁	江口和親	明学	日本	日本	鈴木達次	専修	明治
日本	日本	鈴木達次	鈴木達次	根本雄一	根本雄一	明学	明学	明学	根本雄一	専修	明治
總涉	總涉	總涉	總涉	三浦弘至	三浦弘至	明学	明学	明学	三浦弘至	拓殖	明治
				桜美林	桜美林	中央	中央	中央	桜美林	拓殖	明治
				飯田博	飯田博	拓殖	拓殖	拓殖	飯田博	拓殖	明治
				早稻田	早稻田	中央	中央	中央	早稻田	拓殖	明治
				小谷康幸	小谷康幸	明学	明学	明学	小谷康幸	拓殖	明治
				吉野隆	吉野隆	中央	中央	中央	吉野隆	中央	明治

	宮本正雄	早稻田	寺戸 忠	明学	企
寒河江正人	日本				
河合正行	専修				
塚本修久	明治				
齊藤義明	拓殖				
加藤頼義	明学				
和田達夫	東京	記	総幹	渉会	副
井川裕行	早稻田	總幹	會		
三瓶美憲	桜美林	幹			
公文寛朗	成城	副			
江藤尚志	専修	委			
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	20期 (昭和54年)				
大川雄一	専修				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	21期 (昭和55年)				
八巻 稔	拓殖				
菊池 傑	中央				
和田達夫	東京	松尾重巳	大森新一郎	上岡由起男	大谷知未
井川裕行	早稻田	桜美林会	中央	明治	東京
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	22期 (昭和56年)				
今泉美保	早稻田				
芽根正宏	早稻田				
越智信喜	中央				
高橋清一	東京				
古川浩之	中央				
根来俊久	東京				
吉沢 賢	中央				
	23期 (昭和57年)				
浅田 毅	中央				
松沢 宏	早稻田				
大谷知未	東京				
上岡由起男	明治				
大森新一郎	中央				
松尾重巳	桜美林会				
菊池 傑	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	24期 (昭和58年)				
増山輝義	明治				
石田俊正	東京				
辻 伸晃	早稻田				
大塚俊之	拓殖				
小野重光	中央				
三原恵理子	中央				
古川浩之	中央				
根来俊久	東京				
吉沢 賢	中央				
	25期 (昭和59年)				
畠山裕弘	専修				
谷田辺浩	早稻田				
武田裕二	東京				
内藤健一	早稻田				
村松正朗	中央				
田辺和弘	中央				
松本雄造	中央				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	26期 (昭和60年)				
保木俊司	拓殖				
小沢仁志	早稻田				
伏田広幸	中央				
小暮喜一	明治				
岩崎貞明	明学				
大津 寿美	専修				
旧須藤	書会				
吉沢 賢	中央				
	27期 (昭和61年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	28期 (昭和62年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	29期 (昭和63年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	30期 (昭和64年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	31期 (昭和65年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	32期 (昭和66年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	33期 (昭和67年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	34期 (昭和68年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	35期 (昭和69年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	36期 (昭和70年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	37期 (昭和71年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	38期 (昭和72年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	39期 (昭和73年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	40期 (昭和74年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	41期 (昭和75年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	42期 (昭和76年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	43期 (昭和77年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城				
江藤尚志	専修				
三宅宏司	中央				
平野行孝	中央				
寺川富啓	中央				
関根 宏	中央				
	44期 (昭和78年)				
田辺和弘	中央				
大森新一郎	中央				
和田達夫	東京				
井川裕行	早稻田				
三瓶美憲	桜美林				
公文寛朗	成城	</			

企 会 幹 副 委				企 会 幹 副 委				企 会 幹 副 委			
27期（昭和61年）				29期（昭和63年）				31期（平成2年）			
平野勝己 明治 菅原龍男 東京 谷村直城 東京 藤生幸男 早稻田 大宮千秋 早稻田 日野孝幸 中央 企 会 幹 副 委				小桧山英太郎 早稻田 日向知史 拓殖 大貫成美 専修 平田経一 東京 刀川勇一 中央 企 会 幹 副 委				末廣丈男 専修 児玉晃治 上智 鈴木美輝 早稻田 実石利幸 拓殖 葛山宏 中央 鎌木恵子 中央 企 会 幹 副 委			
28期（昭和62年）				30期（平成元年）				32期（平成3年）			
田中正也 東京 渋谷勇治 中央 前田浩二 中央 辻 善行 明学 平岡義淳 拓殖 小鳩秀徳 専修 企 会 幹 副 委				辻 伸吾 上智 神谷広幸 東京 伊藤敏郎 専修 橋本喜久 拓殖 西尾 努 明学 山本征司 早稻田				蓮香正英 東京 圖師守和 中央 羽鳥秀介 早稻田 宇野達雄 東京 石川敦子 拓殖 但野端子 中央 企 会 幹 副 委			
34期（平成5年）				33期（平成4年）				33期（平成4年）			
矢口朋来 東京 小林賢一郎 東京 高木辰徳 拓殖 吉本 薫 拓殖 石川正和 中央 企 会 幹 副 委				圖師守和 中央 羽鳥秀介 早稻田 宇野達雄 東京 石川敦子 拓殖 但野端子 中央 書				圓師守和 中央 羽鳥秀介 早稻田 上智 関ひろ美 蓮香正英 東京 宇野達雄 専修 上智 会 幹 副			

中里清乃	上智書
35期(平成6年)	拓殖委
清水寿哉	東京副幹
市丸徹	中央會
田中茂樹	中央副幹
鈴木克敏	東京會
高木恭子	中央會
神谷以土子	中央會
鴨沢義勝	拓殖會
小野寺公子	上智會
金沢	上智會
36期(平成7年)	上智書
荒井剛	中央副幹
奥山英男	明治副幹
中真生	東京副幹

38期	河口大輔	小林賢一郎	東京	拓殖
植田修	河口泰三	櫻木淳一	明治	千葉陽一
中央	溝口義郎	岸本有巨	中央	東京
幹委	菅野貴裕	大畠千春	中央	早稻田
38期(平成9年)	安達愛	宮越亜佐子	東京	専修
		上智	中央	幹委

56期 (平成27年)	大久保莊一	東京	会	中西亮介		59期(平成30年)
	山本恵未	中央	編	村中礼菜	東京	
	伊禮巧真	専修	涉補	小島知樹	専修	
	大川未紗子	英和	情	高石治	専修	
	落合成昭	拓殖	幹	三軒家綾香	明治	
	河合慶太	明治	名	武塚直也	早稻田	
	望月淳平	専修	副・涉	岡田啓太朗	中央	
	高取慧	専修	副・編	石井豪浩	拓殖	
	鈴木貴裕	中央	副・編	岡田啓太朗	中央	
管	堀松知剛	東京	会	小野沙耶	拓殖	
	福伊永花	東京	管	石井豪浩	中央	
	日野皓文	拓殖	会	小早川みづき	明治	
	船木翔太	明治	名	三田眞貴子	中央	
	石塚幹菜	東京	編	早稻田	副	
会	名	編	57期(平成28年)	河合萌子	東京	涉
	橋本佳奈実	東京	委	中田恵	専修	塚田裕介
	八城裕樹	委				東京
	人見優斗	専修				会
	下地区	管				
	中村達哉	会				
森海翔	名	編	58期(平成29年)	今西浩人	東京	59期(平成30年)
	遠藤功司	東京	会	中村達哉	専修	小川希生
	鈴木粹明	拓殖		藤本侑花	管	早稻田
	宮脇英祐	中央		飯塚浩祐	副	大島康輝
	伯本和也	早稻田		藤本侑花	専修	明治
	早稻田	副				

笠谷佳範	中央	秋裕斗	専修
栄田由貴	専修	刈谷慧斗	専修
長繩礼香	東京	池田将吾	東京
治郎丸諒	明治	釜屋明英	明治
6 1期(令和2年)	幹	6 3期(令和4年)	
味園瑞萌	中央	石田龍之介	
大久保拓紀	明治	磯部望	編
藤澤留依	中央	井手正人	中央
松家京平	早稻田	東京	
西明日香	東京	若旅雅弥	
伊藤千瑛	早稻田	高野郁大	
与那城竜太郎	専修	拓殖	
6 2期(令和3年)	情	情	副・委
飯島武	中央	会	涉
森美鈴	明治	情	
長尾太玖海	東京	会	
保坂茅陽	中央	涉	
渉	会	涉	
会	副	涉	
副	委		

全日本学生合氣道連盟規約

全日本学生合氣道連盟規約

施行 昭和三十四年

改正 平成二十年九月十日

第一章 総則

第一条（目的）

本連盟は学生間における合氣道の普及及発展と、連盟校相互の連絡並びに互いの親睦融和を図り、学生合氣道の発展に寄与することを目的とする。

第二条（流派）

流派はこれを問わない。

第三条（名称及び事務所）

①本連盟は全日本学生合氣道連盟と称する。

②本連盟は事務所を日本武道館

内に置く。

第四条（事業）

本連盟は第一条の目的を達成する為に以下各号所定の事業を行う。

一、演武会

二、合同合宿

三、演武旅行、合同稽古、刊行物

の発行

四、その必要と認められる諸

事業

第五条（構成単位）

本連盟は各大学公認の合氣道部、又は連盟委員会によってこれに準ずると決議された合氣道会の大学単位を以つて構成する。

第六条（脱退）

①六条の一の一項ないし三項の規定は、任意脱退の場合に準用する。

第二章 加盟及び脱退

第六条の一（加盟）

①連盟加入に当つては、第七条に定める書類を事務所に提出しなければならない。

②新規加盟は連盟委員会による審議を経た後、十六条二項に定め

る議決により効力を発する。

③委員長は、前項の審議を行うため、書類の提出から二週間以内に委員会を招集しなければならない

④第五条後段に当たる大学を加盟させるに当たつては、正式加盟までの一定期間、これを準加入とすることができる。

第六条の二（脱退）

②連盟委員会は、第二十四条一項

各号に当たる加盟校を強制的に
脱退させることができる。

第七条（登録）

①加盟校は毎年、以下各号の連盟
事務所へ文書を以つて提出する
ことを要する。

一、名称

二、所在地

三、連絡場所

四、加盟校規約

五、本年度役員氏名、住所、連
絡先

六、行事日程

七、加盟員名簿

八、その他必要と認められる諸
事項

②前項の提出は、電磁的方法に
より行なうことができる。

第三章 機関

第一節 総則

第八条（機関）

①本連盟は常時、第二節に定める
連盟委員会を置く。

②本連盟は、必要と認める場合に
顧問及び最高顧問を置く事がで
きる。

③前項顧問及び最高顧問は、連盟
委員会の決議を経て、委員長が
これを委嘱する。

第九条（任期）

①任期は一年とする。但し任期中

に交代する場合は、後任者の任
期は前任者の残余の任期とす
る。

②連盟委員は、加盟校より選出さ
れる。

③連盟委員会は、委員長一名、副
委員長二名を定める。

④削除

第十三条（構成）

①連盟委員会は、連盟委員によつ
て構成される。

第十四条（担当委員）

連盟委員会は、以下各号に定め
る担当委員を置く。

第十一条（最高顧問）

削除

第二節 連盟委員会

第十二条（連盟委員会）

①連盟委員会は、連盟の最高機関
である。

②連盟委員会は、本連盟事業計画
の立案及び実施を行う。

第十三条（構成）

①連盟委員会は、連盟委員によつ
て構成される。

第十四条（担当委員）

連盟委員会は、以下各号に定め
る担当委員を置く。

一、渉外
二、広報

三、名簿

四、情報管理
五、編集

六、会計

第十五条（委員会）

①連盟委員会は毎月一回、定例委員会を開く。

②委員長が必要と認めた場合には、緊急委員会を召集する。

第十六条（定足数及び議決）

①連盟委員会は委員の三分の一の出席により成立する。但し、委任状も可とする。

②連盟委員会の議決権は、各委員につき一票とし、議決は出席委員の過半数により成立する。賛

否同数の場合は、委員長の決定するところによる。

第三節 任務

第十七条（任務）

①委員長は連盟を代表する。
②副委員長は委員長を補佐する。

る。

第十八条（誠実義務）

連盟委員は任務を迅速かつ誠実に行わなければならない。

第四章 会計

第十九条（経費）

連盟の経費は、加盟費、分担金、寄付金、その他の収入を以つて充てる。

第二十条（会計年度）

会計年度は毎年十一月に始まり、十月に終る。

第二十一条（予算）

予算は、会計担当委員が之を作成し、連盟委員会の承認を得る事を要する。

第二十二条（決算）

決算は、会計担当委員が之を作成し、連盟委員会の承認を得る事を要する。

第二十三条（細則）

削除

第五章 罰則

第二十四条の一（罰則規定）

連盟委員会は、以下各号に定める処分を行うことができる。

- 一、強制脱退
- 二、権利停止

三、警告

第二十四条の二（脱退）

①連盟委員会は、以下各号に該当する加盟校を、強制的に脱退させることができる。

一、連盟の威信を著しく傷つけた場合。
二、連盟の規約に違反した場合

合。

三、連盟と他団体の関係を著しく悪化させた場合。

四、その他不適当と認められる場

合。

②脱退処分を行う場合には連盟委員会は直ちに調査委員会を組織し、之を調査することができ

る。

第二十五条（復権）

除名処分校の復権は、十六条二項に定める決議による。

第六章 改正

第二十六条（改正）

本規約の改正には、連盟委員総数の三分の二以上の同意を要する。

編集後記

連盟誌 第五十号

まず始めに、今年度の連盟誌を発行するにあたり、ご協力いただきました、先生方、加盟校の皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

我々63期連盟委員一同は、新型コロナウイルスによる影響で被つた連盟としての停滞を踏まえ、従来の方針を踏襲しつつも、依然として猛威を振るう新型コロナウイルスを鑑み、連盟自体の繋がりを再興すべく新たな方針を模索しております。

私といたしましても、こうして発行することの出来た連盟誌を通して、先生方のお考えや他の加盟校の様子を認識することで、少しでも連盟に対する理解が深まり繋がりが強まるきっかけになれば、と願っております。

最後になりましたが、今後の加盟校及び全日本学生合氣道連盟の益々の発展を心から願いまして、編集後記に代えさせていただきます。

第六十三期編集責任者 釜屋明英

令和四年十月六日発行

発行責任者 池田将吾
編集責任者 釜屋明英

発行所

千代田区北の丸公園二一三
日本武道館学生武道クラブ内
全日本学生合氣道連盟

印刷所

スピード冊子印刷.com
電話 ○一二〇一九三九一八三四

<https://speed-books.com/>